僕たちの挑戦

尾道貴志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕たちの挑戦

【Ｎコード】
Ｎ１２０８Ｖ

【作者名】
尾道貴志

【あらすじ】
「あなたの夢を私が叶えてあげる」そんな魔法の言葉にとまどいながらも、少女たちは自分の夢を追いかけていきます。よかったらちょっとだけ応援してあげてください。

ＦＣ２ブログ（僕たちの挑戦）にて同時進行で連載中です。毎週金曜日更新（予定）

僕たちの挑戦　ｈｔｔｐ：／／ｇａｒａｋｕｔａｋａｎ２０１２．

blog.fc2.com/

喫茶　「がらくた館」

1　喫茶「がらくた館」

カラカラカラン

乾いた鈴の音とともに扉が開きゆるやかな風が舞い込んできた。風と一緒に飛び込んできたのはユカ。日に焼けた肌に昼下がりの陽射しが眩しい。

「マスター　こんにちは！　」

「いらっしゃい、ユカちゃん。あれ学校は？」

「なに言ってるの、今日からな・つ・や・す・み」

「そうか、そりゃおめでとう、健全な小学６年生よ」

「ありがとう。これ『ハハ』からの差し入れ、田舎から送ってきたモモだって」

「おお、これはまた、かたじけない」

「何にする？」

「オレンジジュース」

「通信簿の出来悪かったんだ」

「えっ、何で分かるの？　ポーカーフェイスに自信あったのに」

「ユカちゃんが機嫌のいい時はレモンティー、それでもって落ち込んでるときはオレンジジュース」

「うぬ、やるなおぬし、さすがプロ」

「おほめいただき光栄です。数あるお客さんの中でも小学生の常連さんはユカちゃんだけですからね」

喫茶「がらくた館」は小さな港を見下ろす山の山麓から少し登った所にある。坂道だらけの町は石畳が連なり、旅ゆく人の心を懐かしい気持ちにさせてくれる。店のすぐそばには観光用のロープウェ

イ、山の頂上からは青い海と緑の島々、眼下の港はまるでミニチュアセットのようだ。

「ね、マスター、ちょっと相談があるんだ」
「うーん、どうしようか。タダってわけには・・・」
「いじわる　！　」
「あとで　リムーまで買い物頼もうかな」

「リムー」は坂道を5分位下りたところにあるフルーツショップ、この店のレモンの味は格別、酸味と苦みと甘味のバランスが絶妙だ。こんなに「素敵な」レモンにはなかなかお目にかかれない。ちなみに「リムー」はペルシャ語で「レモン」の意味。店の主人はアラビアマニア、果物のＰＯＰがアラビア語で書かれてある。「なんて書いてあるか読んで！　」と頼むと機嫌がよくなりレモンをおまけにくれたりする。

「了解」
「よし、交渉成立、で何なの相談って」
「うーん　信じてもらえるかわからないんだけど・・不思議なことがあってね・・」
「・・・・」
「誰にも言わないって約束してくれる？」
「ふむふむ」
「マスターなら私より人生長く生きてるし、いろんな経験もしてるでしょ、お客さんの相談にも乗ってるだろうし」
「なるほど、でもユカちゃんは1つ大きな勘違いをしてる」
「えっ何？」
「この店ができてどれくらい？」
「えーと、あたしが6年生になってからだから・・・3か月！」
「だから僕もマスター3か月」

「えっ、うそ、ほかの場所でずっとお店やってたんじゃないの」
「いや、初めてだよ」
「だって、注文で私の気持ちを当てたり　そうは思えないけど」
「だって、ユカちゃん開店してから2日に1度は来てるだろ、がらくた館の最初の常連さんてわけ」
「常連さんて言われると嬉しいけど、家が隣だからだよ、私のお小遣いじゃ週に1度しか注文できないし」
「いいんだよ、毎日のように顔を見せてくれればそれで常連さん、今日だってモモもらっちゃったし」
「そっか、わたし常連さんなんだ」
「前は何やってたの？」
「サラリーマン」
「へー、なんで辞めちゃったの？」
「50歳になった記念に」
「ずっとサラリーマン？」
「ううん、ちがうよ」
「その前は何やってたの？」
「学校の先生」
「うっそー　ちょっとだけ衝撃」
「何で、見えない？」
「うん、見えない」
「どうして」
「見た目もヒゲ面だし、イメージ合わない！」

オレンジジュースの氷が溶けてカランと音を立てる、窓の外からは船の汽笛の声がゆるやかに忍び込み、2人の会話をほんの少しの時間だけ止めてみせた。

「ところで何だっけ、その不思議な出来事って」
「うん・・自分でお願いしといて何だけど、話そうかどうかちょっ

と迷ってる・・」
「どうしてだい？」
「夢みたいな話だし、それにちょっぴり怖い・・・」
「いいよ、僕もちょっと興味がわいてきた、話す気持ちが固まってからじっくり聞くから」
「ありがと、じゃ、買い物先に行ってくるよ」
「そうだね、夏の太陽をいっぱい浴びておいで」

ユカはショートカットの髪を軽く揺らすとリムーへ向けて駆け出していく。坂道の下では夏の光に輝くレモンたちがユカを待っていたかのようにキラキラと笑顔を見せた。

「サラーム　ユカちゃん」
「サラーム　おじさん！、ペルシャ語覚えたよ、『こんにちは』でしょ」
「おっ、うれしいね、今日は何をお求めで？」
「レモンを２０個、がらくた館のお使いなの」
「そりゃ感心、ではとっておきのエメラルドレモンを１つおまけしておこう」
「ありがと、わっ、きれい！」
「持っていると幸運が訪れる」
「信じる！じゃ、また来ます」

カラカラカラン
「お帰り」
「ただいま、はい、これレモン、おじさんおまけしてくれたよ」
「さてはペルシャ語しゃべったね？」
「ご名答！」
「こりゃすごい、エメラルドレモンだね」
「うん、持ってると幸せになれるんだって」

「それは素晴らしい」
「マスター、気持ちの整理がつきました、話を聞いて下さい」
「はい、お待ち申しておりました」

放課後

2　放課後

「ユカ、成績どうだった？」
「うーん・・・かなり微妙」
「しーちゃんは？」
「頑張ったわ、これで夏休みにミュージカル教室に通わせてもらえると思う」
「よかったじゃない、約束果たしたんだ、すごいね」
「必死だったもん。オールA取れたらミュージカル教室、呪文みたいに唱えてた」
「おめでとう、やったね」
「ありがとう」

ユカの小学校の通知表は小学校では珍しい5段階評価。AからEまでのアルファベットがにぎやかに並ぶ。各科目に4つずつの観点があるのでオールAともなれば32のAが並ぶことになる。「5年生と6年生はしっかりと自分の学力を自覚して、中学に行って困らないように」という校長先生の考えだそうだ。

「あたしはオールCにBがちらほらといった感じ、ちょっと帰るの気が重いな」
「夏休みは講習？中学受験するんでしょ」
「うん、せっかく小学校最後の夏休みなのに、ほとんど遊べないと思うとね」
「テニスは？」
「合格できるまではお預けかな」
「しーちゃんはずっとミュージカル？」

「あさってから全部で３０日間、途中でプロの公演も見られるし、最後にはオーディションがあるの、でも、安心して、サマーキャンプは行くから」
「よかった、あたしもキャンプだけは参加させてもらえそう、何しろみんなで行ける最後のキャンプだからね」

毎年行われるサマーキャンプにユカたちが参加したのは1年生の時、この時に親しくなった5人組で毎年欠かさず参加してきた。最初は母親同士のつながりから始まったキャンプも4年生からは自分たちで出し物を考えたりオリエンテーリングコースを決めたりと夏の最も楽しみなイベントとなった。

「よう、お待たせ」
「お、来たな3人組」
「さぁ夏だ、キャンプだ、お祭りだ」
「野球の合宿は大丈夫なの？」
「おう、危なかったけど1日ずれてくれた、セーフ」
「ところでさ、大ニュース」
「なになに」
「ちょっとショックなんだけど、な、教授」
「僕、引っ越すことになった」
「えっ、うそ」
「父親の転勤が決まった」
「どこに？」
「アメリカ」
「なんかちょっぴりかっこいいね」
「ま、これも人生経験の1つだし」
「相変わらず冷静ね、すぐに行っちゃうの」
「いや、卒業後の4月」
「そっか、さびしいけどちょっと安心、すぐにいなくなっちゃうの

かと思ったわ、キャンプは行けるんでしょ」
「もちろん」
「ウルシは聖学目指すの」
「おう、なんたって野球の名門だからな、プロを目指すにはしっかりしたチームでないと、まっ、オレの偏差値でも何とか入れそうだし野球のセレクションに通れば合格ラインを少し下げてくれるんだ」
「燃えてるね、野球少年、ところで聞いて。しーちゃんオールAとったの！」
「へーすごいじゃん、これでミュージカル教室だっけ」
「おめでとう志水さん」
「ありがとう、教授」
「ロクちゃんは元気ないね」
「いつものことだよ、何しろ今日はロクの最もブルーな日だからな」
「ああ、志水さんすごいよな、ぼくの通知表なんかDのオンパレードだから、先生はよほどの事がないとEはつけないって話だから、実質オールEみたいなもんさ、勉強できるみんながうらやましいよ」
「ロクちゃん、大丈夫、あたしも勉強苦手だし、仲間・仲間」
「ユカの言葉あまりフォローになってない気がするんだけど」

6年生にもなると変に男女が意識して、お互いに反発したり、妙によそよそしくなったりする。現に同じクラスの中には今までに感じたことのない変な雰囲気を感じることもあったし、誰かが誰かに告白メールを送ったなんてうわさも流れたりした。けれど5人組は何とも自然体、ユカは思う。（このまま、ずっとこの仲間で過ごしていきたい、こんなに落ち着ける居場所はないから）

「ところで、キャンプだけど」
「最終日のナイトパーティーの出し物は1グループ6分、優勝賞品はメンバー全員の写真の入った記念パネルに自分たちでデザインできるオリジナル携帯ストラップ」

「園田君、やっと元気になったみたいね」
「へへっ」
「去年は入賞できなかったからな」
「毎年、優勝は6年生のグループから出てるから、今年はなんとしても優勝だ」
「教授、去年の優勝ってどんな出し物だっけ」
「モンスターに仮装してダンスを踊った、あれは見事でした。音楽が鳴って登場した瞬間に大歓声が上がったのを覚えてる」
「みんな考えてきた？じゃ、ウルシから」
「あ、悪い、まだ考え中」
「しーちゃんは」
「一応持ってきたけど・・」
「教授は」
「ごめん、まだです」
「ぼくも・・」
「えーっ、ロクちゃんも、ダメだなぁ男子」
「まあ、いいじゃない、ユカ。わたしも考えてきたけど何となくだし、私たちにとって最後のナイトパーティーだからみんなで1から話していきましょうよ」
「おお、それがいいよ、さすがは志水さん」
「ぼくも賛成だな」
「ロクちゃんも調子いいんだから」
「じゃあ、みんなでアイデア出しましょ」
「しーちゃんがそう言うなら、そうしますか」
「さんせーい」

最後のナイトパーティーという言葉がユカの心にチクッと刺さる。卒業したらウルシは野球の名門校へ、教授はアメリカ、しーちゃんもミュージカル学院に通える東京の寮制の学校を受けるらしい。ロクちゃんは地元の学校へ、そしてあたしはどうなってるんだろう。

みんなが離れ離れになる光景が頭をよぎる。この仲間で一緒に過ごせるのも限られた時間しかないんだ・・・

放課後の静かな廊下にけだるい風が少し足早に通り抜けた。

落雷

3　落雷

「じゃ今のところは何か音楽をやるってことでいいか、どう教授」
「異議なし、ずいぶん時間がかかったね」
「いいじゃないの、キャンプまで時間はあるし、じっくりみんなでいいものを作っていきましょうよ」
「志水さんがいいならぼくも賛成」
「ロクちゃん、自主性、自主性」
「ところで今何時になった？」
「4時過ぎよ、先生には5時までは教室を使っていいって許可をもらってるから」
「なんだか外が暗いよ」
「ほんと、真っ暗、夕立かも」
「降り出す前に帰らなくちゃまずいな」

3階の教室の窓の外は暗雲が立ち込め、まるで夜のような暗さ、遠雷がかすかに耳を掠める。

「早く帰ろう、あたしの苦手なもの中で雷はかなり上位」
「そういえば2年生の時のキャンプでユカが雷で泣き出してキャンプリーダーにずっとつかまってたよな」
「不名誉な思い出」
「だれだって怖いものはあるわよ」
「志水さんは？」
「私はガンダム」
「何、それ？」
「ゴ・キ・ブ・リ、口にするのも怖いからそう呼ぶの。我が家では

通じるわ」
「それ、最高。ガンダムが出たーって叫ぶんだ」
「あ、ガンダム！」
「キャッ！」
「冗談だよ」
「漆山くんの意地悪！」

不気味な外の景色をよそに教室の中に華やかな笑い声が響く。

「おっと、どうやら間に合わなかったみたいだね」

バラバラという激しい音が教室中に響く。降り出した雨はドラムをたたくがごとく音を立てて窓に吹き付けた。間をおかず一瞬空を白く稲光が染める。遠くに見える港の船が影絵を見るみたいにシルエットになって浮かび上がった。続けて地鳴りのような雷鳴。

「きゃーっ、神様助けて！」
「ユカちゃん、ぼくは神様じゃないから離して。Tシャツ伸び切っちゃうよ」
「ごめんロクちゃん」
「稲妻が走るのはっきり見えたぜ」
「あっ、また光った、来るぞ」
「もういやー」

バリバリッ！　およそ雷とは思えぬ音と胃袋に響くような衝撃が5人を飲み込む。瞬間今まで見えていた互いの顔があっという間に見えなくなった。

「て、停電だ」
「ほんとに助けてー」

「すぐに回復するよ、学校には自家発電装置があるからね」
「教授はこんな時でも冷静だな」
「ま、真夜中ってわけじゃないし、ほら、みんなの顔も目が慣れて見えてきた」

知らず知らずのうちに小さな輪になり身を寄せ合っているのに気づく。気がつくとみんなの顔が目の前にある。ちょっぴり驚くとともに、なぜかユカは嬉しい気持にもなった。

「あっ電気が灯いた」
「みんな、大丈夫？」
「だ、だいじょうぶ・・だと思う」
「ユカ以外は大丈夫みたいだな、けっこうでかくてビビったけど、よく考えたら学校にいる限り安全だよな」
「さっきのは、もしかしたら学校の避雷針に落ちたのかもしれない、これ以上大きいのはないよ」

激しい雨は相変わらずだが、雷鳴は心なしか小さくなりスプリンターのように学校の上のトラックを駆け抜けたように思えた。

「雨が止むまではもう少しかかりそうだからこのまま、教室雨宿りといきましょう」
「そうね」
「えっ？」
「今のユカの声？」
「あたしじゃないよ」
「えっ、だって女子2人しかいないよね」
「もう1人いるわ」
「えっ」
「えっ」

「ほら、あなたたちの後ろ」

声は教室の後ろで身を寄せていた5人の背中越しに聞こえてくる。教室の前を見ると教卓の上に誰かが腰をかけているのが見える。

「おまえ、だれ？」

「うちの学校の生徒じゃないわ」

「な、なんでそこにいるの」

5人は狐につままれたように顔を見合わせると再び教卓を見つめ返した。そこには見たことのない少女が1人、いたずらっぽい笑顔でこちらを見ている。年のころは同年代か中学生くらい、青いワンピースのような光沢のある洋服に、少し先のとがったエナメルなのかこれまたピカピカ光る白い靴が蛍光灯の光を反射してまぶしい。足をぶらぶらとゆっくり揺らしながらもう一度5人に笑顔を振りまいた。

「あなた、本当にだれ？」

「ま、だれでもいいじゃない、雷はもう来ないわ、安心して」

「中学生？」

「まっそんなところかしらね、とにかく、はじめまして」

「こちらこそ、で、なんでここにいるの、いつ入ってきたの」

「さっきの停電の時におじゃましたわ。気がつかないのは無理ないけど。ね、あなたたちよかったら少しだけ私とお話をしない、悪い話じゃないから」

「お話？」

「そう、話を聞くぐらいいいでしょ」

「まあ、聞くだけなら・・・」

5人は再び顔を見合わせお互いの怪訝そうな顔を確かめ合う。な

ぜか断りきれない不思議な気持ちに全員がとまどっていた。

少女

4　少女

「あなたたちの夢は何」
「夢？」
「そう将来の夢よ、志水さんは」
「えっどうして名前を？」
「私はなんでもわかるのよ」
「私はミュージカルスターになること」
「漆山君は」
「オレはプロ野球の選手になる」
「町田君はアメリカに行くんだっけ」
「宇宙工学の専門家が目標です、英語を勉強するにはいいチャンスだと思ってます」
「さすがね」
「篠宮さんは」

ユカはとまどった。（みんなすごい、今からはっきりとした夢を持って、それに向かって頑張ってるんだ、それに比べてあたしは・・・）

「あたしはまだ・・何をしたいのか見つかってないの、みんなを尊敬しちゃう」
「心配しないで、小学生なんてそんなものよ。今から明確な夢を持っている人の方が少ないんじゃない」
「・・・」
「あなたもそのうちにきっと見つかるわ、どんな未来かはお楽しみ」
「最後は園田君」

「ぼ、ぼくは・・」
「何？」
「ちょっと恥ずかしくて言えないよ」
「恥ずかしいことなんかないわ、夢なんだから」
「でも、話したらみんなに笑われるかも・・」
「ロク、大丈夫だよ、誰も笑ったりしないって」
「そうよ、園田くん」
「うん、建築家になりたいんだ、ほらぼくの家は小さくておんぼろだろ、だからうんとカッコイイ家を設計して家族に家を建ててあげるんだ」
「ロクちゃん、素敵、とってもいい夢だよ」
「でも、ぼく算数も技術家庭もDだし・・・」
「あたしもCだから」
「だからあんましフォローになってないって」

5人は初めてお互いの夢をはっきりと知った。知らず知らずのうちにみんな大人になってるんだ。ユカは少ししょっぱいような気持ちになる。夏休みに通う塾の講習が何となく頭に浮かぶ、あたしも頑張らなくちゃいけないんだ。

「みんな立派じゃない、感心したわ、ねえ、あなたたちの夢を叶えてあげましょうか」
「えっ夢を叶えるだって」
「そうよ、悪い話じゃないでしょ」
「そんなことできるの？」
「そうだよ、オレたちをからかってるんだろ」
「信じるか信じないかはあなたたち次第ね」
「そう簡単には信じられないです」
「それはそうね、でも夢は叶えてみたいでしょ？志水さん、あなたはミュージカルスターになりたいんでしょ、でも必ずしもなれると

は限らない、きっと夢を目指してる人のせいぜい1割程度じゃない、実現できる人って」
「・・・」
「漆山君、聖学に行ったからって将来プロになれる保証はないわ、きっとあなたより野球の上手な人はたくさんいるでしょうし、どんなに努力しても怪我や故障をしてプロにまでたどり着けない人が山のようにいる。科学者だってそう、10年以上大学で勉強して何本も論文書いて、それでも教授になれない人はいっぱいいるのよ」
「テンション下がるよなあ、なんか、オレたちに恨みでもあるんじゃない」

とまどいは小さなぐちとなって少女に向かった。夢は必ずしも叶うものばかりじゃない。
ユカは初めてそのことを感じた。今までは夢というのは心に持ち続けて努力を重ねていけばいつかは必ず叶うものだと心の奥で思っていた。自分もやりたいことさえ見つかれば夢が実現すると何となく信じていた。でも、そうじゃないんだ、世の中には叶わない夢もいっぱいあるんだ。

「あなたのいうことはわかったわ、でも、どうやって私たちの夢を叶えてくれるっていうの？」

しーちゃんが珍しく怒ったように詰め寄る。

「あたしの言う通りにすればいいだけ」
「何をすればいいのかな」
「ちょっと待て、ちょっと待て、だまされるな、こいつは新手のサギだ、きっとこのあと小遣いを持ってこいとか、何かチケットを売りさばけとか、そんな話になるに決まってる。ばあちゃんが言って

たぞ、上手い話に気をつけろって」
「くくっ、すごい想像力ね、あなたならサギに引っかからないわ」
「やっぱり信じられない」
「信じられない」
「そんなの信じられないよ」

ユカ、教授、ロクの言葉が思わずかぶる。

「そうね、いきなり信じろという方が無理かもね、じゃこうしましょう、1つ予言をしてあげる、それが当たったらあたしの話を信じてくれる？」
「予言だって？」
「おもしろい、予言してみろよ、最も大したことはできないだろうけど」
「明日の午後1時過ぎにこの町でちょっと大きな地震が起きるわ。港では積荷が崩れてけが人も出る、でも命には別条ないから安心して。どう、さすがに地震ではうそはつけないでしょ」
「うっそー」
「だから言ったでしょ、信じる信じないはあなたたち次第ですって」
「・・・」
「もし、信じてくれたなら、こうしましょう、3日後の夕方の5時この教室に来て。そこでまたお話しましょう」
「どうする？」
「地震なんて予言できるわけないと思うけど」
「うん」
「わかった、きっと来るよ」
「信じてくれてありがと」
「3日後の午後5時でいいんだな」
「ええ、午後5時きっかりにしましょう。ただし、チャンスは1回きりよ、その日に来なければこの話はおしまい。心配するでしょう

から家族には言わないほうがいいかもね、もちろん危険なことは何にもないから」

全員が顔を見合わせた次の瞬間、少女の姿はどこにもなかった。

「き、消えた・・・」

5　予言

「というわけなの、マスターどう思う」
「これはまた不思議な話だね」
「でしょ」
「お母さんには？」
「話してない」
「今の時点ではそのほうが賢明かな」
「話したって信じてくれるわけないしね、危ないから行っちゃいけないって止められるのが目に見えてるし」
「夢か・・で、ユカちゃんはどうするの」
「あたしまだ将来何がやりたいのか自分でもわからないの、だからピンとこない」
「なるほどね、でも１つだけアドバイスするなら、夢って人に叶えてもらうものじゃないんじゃないかな、僕もこの店出すまでにいろーんなことがあって５０年かかったわけで、でも、それだけにものすごく愛着もあってね、こうしてユカちゃんがお客さんとして来てくれるのが本当に嬉しいんだよ」
「そうだよね、よく考えてみたら昨日の事はそれこそ真夏の夢か幻かって気がしてきた」
「落ち着いた？では特製のレモンスカッシュをごちそうしようか、もちろんユカちゃんの買ってきてくれたリムーのレモンでね」
「わっ、ありがとう」

マスターが棚からグラスを取ろうとした瞬間、店のドアの鈴が少し乱暴にカランカランと音をたてた。
「いらっしゃいませ」

「えっ、マスター　ちがう、地震！」

店全体が小刻みに揺れ、やがてその揺れは大きな波に変わった。棚のグラスが一度に床に落ち甲高い音を立ててガラスのしぶきが跳ぶ。カウンターの水槽は波を打ち、中のグッピーとネオンテトラがあわてた様子で水中を泳ぎ回る。

「キャーッ、大きい！」

カウンターを飛び出したマスターがそばにあったバスタオルでユカの頭をくるみ、テーブルの下に抱え込む。３０秒にも満たない時間がユカにはとてつもなく長い時間に感じられた。やがて沈黙がよみがえる。

「ユカちゃん、大丈夫かい」
「マスター！地震よ、あの子の言った通りになった！あの子の予言が当たったの！」
「・・・」
「港で積荷が崩れるの、ケガ人がでるわ」
「・・・」

窓の外から不気味な鳴き声のように消防車のサイレン音が飛び込む、救急車の鳴き声も交えて港の方からはスピーカーの声、ホイッスルの音、ただならぬ喧騒が風に乗って舞い上がってくる。

「あの子は言ったの、今日地震が起きるって、港の事故もきっとあの子の予言通り起こってるんだわ」
「どうやらその女の子の話は本当のようだね」
「マスター、ごめん、あたしみんなに会わなくちゃ、みんなに会ってくる！」

「わかった。何かあったらいつでもおいで、これは店の携帯電話、ボタン1つでここにつながるから、しばらく持っててていいよ。それから気が動転した時にはこいつをかじるといい、冷静になれる魔法の薬」
「あっ、エメラルドレモン」
「ありがとマスター、じゃ行ってくる」

ユカは走る、きっとみんなも来ているはずだ。ユカには妙な確信めいたものがあった。

坂を駆け下り、リムーのある分かれ道を港と反対側に折れる。雑木林を過ぎたところに長く続く石段、駆け上ったところに鳥居が見える。クジラ神社と呼んでいる町の鎮守の境内が5人のいつもの集合場所だった。

（いる！やっぱり誰か来てる！）

「ユカ！待ってたよ」
「しーちゃん、やっぱり来たんだね」
「ええ、1人じゃいられなくて」
「あたしも」
「おー、来たか」
「ウルシ！」
「みんな来ると思ったぜ、教授とロクはオレが電話で呼び出したからもうすぐだ」

ずっと昔はクジラの水揚げ港だったこの町の港を守る神社にはクジラを象った石像が2体。これがクジラ神社と呼ばれる所以である。正式には水島神社という。港を一望できる山の中腹にある境内からも港のあわただしさがはっきりと見える。消防車の赤と救急車の白

が夏の光にはっきりと浮かび上がる。倒れた積荷を持ち上げるためかクレーン車のような黄色い車両も見える。

「あっ、2人来たみたい、教授、ロクちゃん、こっち！こっち！」

「予言当たったね」
「あの子の言った通りになったわ」
「じゃ、やっぱり昨日の話は本当ってことか」
「信じられないけど、信じるしかないよ」
「で、どうするの、3日後って言ってたからあさってだよ」
「行くだけ行ってみるってのはどうだ、ほら危険なことはないって言ってたろ」
「何しに行くの」
「夢を叶えてくれるって話だろ、悪い話じゃないじゃん、もしかしたらオレを野球の天才にしてくれるのかも」
「未来を予言したわけだから、超能力者なのかもしれないね」
「どうなの、教授」
「非科学的なことには違いないけど、世界には科学で説明できない力を持つ人が確かに存在する」
「チャンスは1回だけだって言ってたぜ、オレは行く、みんなはどうだ」
「・・・・」
「私も話だけは聞いてみる、ダンスが上達する秘訣を教えてもらえるならラッキーかな」
「僕も超能力と科学のヒントがもらえそうだし」
「頭良くしてくれるかなぁ」
「ユカは？」
「えっ、あたしは・・・」

ユカはためらう。いいじゃない、話を聞くだけなら、何をためら

うの。自分にはっきりとした夢がないこと、そして「夢は人に叶えてもらうものじゃない」マスターの言葉もユカの心を揺らしていた。しばらく考えてからユカはようやくのどの奥から言葉を押し出した。

「う、うん、行くだけ行ってみようかな・・」

「よし、決まった、あさっての夕方5時、家族が心配しないようサマーキャンプの打ち合わせ、帰宅は7時と全員そろって伝えること」

「10分前には行ってるわ」

「じゃあ、校門の前で」

6　ロク

「なんだかおかしなことになったね」
「うん、ユカちゃんはまだ将来の夢が見つからないんだっけ」
「そうなの、だからロクちゃんはすごいよ、建築家になる夢、かっこいいよ」
「う、うん」
「あたし、ロクちゃんの建てた家に住んでみたいよ」
「ありがと」

ユカの家とロクの家は近い。がらくた館をはさんで３００メートルほどの距離になる。ユカの家は道を一つ隔ててがらくた館の隣。小さな庭がいつもきれいに手入れされているのはおじいちゃんの仕事。築５０年を越える昔ながらの平屋の家は「古い」というよりは大切に住んできた「趣」を感じさせる。
ロクの家はがらくた館を出て西へ３〜４分ほど。石段を降りたところに６戸並んでいる市営住宅の１つだ。

「元気ないね、悩みでもあるんでしょ」
「どうしてみんな勉強できるのかな、志水さんオールＡだったんでしょ」
「あっ、それか」
「ぼくもまじめに頑張ってるんだ、授業もちゃんと聞いてるし、毎朝漢字と計算の練習だってしてるし、でも５年生から始まった小テスト、あのテストになると全然だめなんだ、一生懸命覚えたことほとんど忘れちゃうんだ」
「うちの学校、テストの点で評価するからしんどいよね、塾でほか

の学校の人に聞いたら毎週小テストなんてしないんだって、評価もうちの学校みたいにAからEなんて細かくつけられたりしなくって『よい』とか『ふつう』とかアバウトらしいし、校長先生を恨んじゃう」
「中学に行っても、高校に行ってもこんな感じなのかな」
「もっと厳しいかもね」
「そうかぁ・・・」
「大人になって会社に入っても成績つけられるらしいよ、チチが『ジンジサテイ』がどうのこうのってハハに話してたの聞いたことある」
「勉強できないと夢って叶わないよね」
「うーん、そりゃ必要だとは思うけど、人間の価値って勉強だけじゃないんじゃない、ロクちゃん優しいし、あたし勉強できても冷たい人はいやだもん」
「そうだよね、ちょっと安心した」
「元気だしなよ、しーちゃんはしーちゃん、ロクちゃんはロクちゃん、2人ともとっても素敵だよ」
「ありがと」
「じゃ、あさって」
「うん、また」

小学校6年生、それぞれが大きな夢や希望に胸をふくらませる反面、それぞれがみんな小さな悩みも抱えている。何かの本に書いてあった。「悩みはチョウになって羽ばたくまでにサナギの中でたくわえる養分だ」って。でもそれはチョウになって初めて気づくことなのだ。

「ただいま、ハハ」
「お帰りなさい、ユカ、地震すごかったでしょ」
「港で事故があったみたいなの、クジラ神社から見てきた」

「あら、そう、怪我した人がいなければいいわね」
「今日はチチ遅いの？」
「そうね、忙しいみたいだからユカが寝た後かもね」
「明日の5時にみんなと学校でサマーキャンプの打ち合わせするから、7時にはちゃんと帰ってくるからハハからチチに言っておいてくれる」
「わかったわ、日が長いとはいってもそれ以上は遅くなっちゃだめよ」
「わかった」
「庭のお花に水あげてくれる」
「うん」

「ただいま・・」
「おかえりなさい、ロクちゃん」
「港はどうだった」
「神社からしか見てないけど消防車とかクレーン車とかいっぱい来てたみたいだった、サイレンの音も」
「そう、怖いわね、ようやく片づけたのよ、おやつにする？」
「ううん、ちょっと疲れちゃったから昼寝していい？」
「珍しいわね、おやつもいらないなんて、あんな大きな地震、生まれてから初めてですものね、驚いたでしょ」
「お母さんも初めて？」
「この町ではね、でも小さい頃住んでいた神戸でものすごく大きな地震にあったことがあるの、もう終わりかと思ったわ」
「へーえ」
「あっ、昼寝の前にちょっと相談、お父さんと話したんだけど夏休みだけでも塾に行ってみたらって、ほら、商店街の郵便局の横に新しくできたでしょ、進学塾じゃなくて学校でわからないところを教えてくれる補習塾なんですって。チラシを見たけどていねいに教えてくれそうよ」

「・・・考えとく」

この2日間の出来事が何とはなしにロクの心に重くのしかかる。ユカの言葉になぐさめられはしても、重い気持ちのすべてを振り払うことはできない。「劣等感」という言葉をロクはまだ知らないが、みんなができることが自分にはできない、その気持ちだけはだれよりもロク自身が強く感じていた。「勉強」という魔物が頭を締め付けているようだ。心の疲れはロクに睡魔となって忍び寄った。

（ぼくは、将来建築家になるのが夢です）
（何言ってんだよ、算数も技術もDでなれるわけないだろ）
（でも、頑張って勉強すればなれるんだ）
（ムリ、ムリ、人には努力で補いきれない才能ってものがあるんだ、お前にはその才能がないのさ、誰が見てもわかるよ）
（そんなことないよ！）

＞あ、園田くん、きみの今回の設計ひどかったね、お客さんからクレームが来たよ、書き直してもらおうかとも思ったけど他の者に頼むことにしたから、暮れの「ジンジサテイ」は覚悟してもらわんとな＜
＞申し訳ありません、社長、ぼくにやり直させて下さい、今度はいいものを書きますから、お願いします！＜
＞いや、もういいよ、君、才能ないみたいだから他の仕事を探したほうがいいんじゃない＜
＞社長、お願いします・・・＜

心の病はしばしば悪夢を誘い出す。誘い出された悪夢は容赦なくロクの心をむしばむ。振り切ろうとしても振り切ることのできないねちっこい悪魔は「夢」というキラキラ輝く宝石を一つずつ黒っぽい石コロへと変えていった。

（夢・・か）
（いやな汗・・）
（夢がなうなんて・・・そんなことあるはずないよ）
「夢を叶えてあげる」という少女の言葉をロクは頭の中で思い出しては繰り返した。

真相（前書き）

真相

7　真相

まだ明るさの十分に残った夏の夕方は、それでも真っ白だった入道雲が微かに赤い色に彩られ、蝉の声の中にはヒグラシの声が紛れ始めている。窓の外をながめていた教授が最初に声をかけた。

「5時10分前、みんなそろったようだね」
「OK！」
「ええ、ちょっと興奮して30分も早く来ちゃったわ」
「ちゃんとサマーキャンプの話って言ってきたよな」
「もちろん、でも7時までは絶対に帰ってこいって」
「私もよ、学校の警備員さんには申請書出しておいたから」
「えっそんなの要るんだ」
「そりゃそうよ、日直の先生だって5時で帰るんだから、黙って使ったら通報ものよ」
「さすがはしーちゃん」
「でも、地震には驚いたね」
「ああ、オレもベッドに寝てグローブ磨いてたんだけど思わず跳び起きたよ」
「港の事故も本当だった？」
「うん、新聞持ってきたの、ほら、見て地方版に事故の事が出てる」

「震度5　水島港で荷崩れ　作業員2人軽傷」

「本当だ、あいつの言った通りだ」
「出まかせが偶然当たったんじゃないとすれば本物の超能力者ってことかしら」

「超能力なんてあるの、教授」
「科学的にはない。でもそれは僕らのものさしで測っているからで、宇宙の中には僕らの知らないものさしがあるかもしれないってこと」
「どういうこと？」
「そうだね、例えば宇宙人、人類はまだ出会ったたことがないから信じていない人が多いけど、宇宙に無限の星がある限り、その中で地球にしか生命が誕生しないって考える方が、確率的にものすごく低いんだ。地球外生命は限りなく無限に近い確率で存在する」
「でも誰も本物に出会ったことないぜ」
「遠すぎて出会えないだけさ、１００キロ続く砂漠にテントウ虫とアリが１匹ずついると思えばいい」
「まず出会うことはないな」
「それは僕らがアリの世界のものさしで見てるからだ」
「どういうこと？」
「テントウ虫は空を飛べるんだ」
「あっ、そうか！アリにとっては限りなく不可能に近い確率でも、テントウ虫ならアリの何十倍も確率が高くなるわ、空から探せばいいんだもの」
「教授、すごーい、あたし尊敬しちゃう」
「要するに超能力もぼくらが知らないだけであるかもしれないってことだね」
「その通り、ロク、お見事」
「ところでもう5時よ」
「あ、ほんとだ、あの子現れないね」
「やっぱりからかわれたんじゃないか？」

５人は教室の後ろの椅子に腰をかけてあの日のようにお互いに顔を見合わせた。

「私ならさっきからいるわよ」

「えっ」
「あっ」

声の方を振り向くと、教卓の上にはあの時の同じように少女が腰をかけ笑顔で語りかける。

「どっから入ってきたの」
「ドアを開ける音なんか聞こえなかったぞ」
「ま、どこからでもいいじゃない、あなたたちの話聞いてたわ、なかなかおもしろかった」
「きみは、超能力者なの」
「残念ね」
「だって、地震を予言して当てたじゃない」
「でも超能力なんて使えないわ」
「じゃ、どうして地震が起きるのがわかるんだ？」
「さあ、どうしてかしらね？」
「そうか、未来人てことか、君は未来を予言したんじゃない、過去の事を僕らに知らせただけなんだ、そうだろう？」
「まあ、そんなとこかしらね」
「じゃ、あたしたちの未来が分かるんだ」
「私が言ったのはあなたたちの夢を叶えてあげるってこと」
「オレ、将来はプロ野球の選手になりたいんだ、力を貸してくれよ、その、未来の技術の詰まったトレーニングマシーンとか、そんなのがきっとあるんだろ？」

少女は相変わらず微かな笑みをたたえながら手を差し出した、そこには・・・

「ネックレス？」
「そう、これはあなたたちを未来へ連れていく道具、自分の手で身

に着けたその瞬間未来へ跳ぶわ。そしてその未来はあなたたちの夢見た未来、今、心に描いている夢が必ず実現しているの」
「うそだろ？」
「信じられない・・」
「信じる信じないは自由、でも地震は起きたわよね」
「未来へ行ったら今の自分は消えちゃうの」
「そうね」
「家族が心配して大騒ぎになるわ」
「ネックレスに触った人以外は、この世界では記憶から消えちゃうから、家族や友達を悲しませることはないわ、それに未来に行けば未来のあなたを今のままの家族が受け入れてくれている、何も淋しいことはないの」
「どう、漆山君、プロ野球の名選手として華やかな人生を送ってみるのは、志水さん、あなたはミュージカルスターとして舞台の上で輝いてるの、素敵な話でしょ」
「でも、あなたはどうして私たちにそんな話をしてくれるの」
「今は言えないわ、話せる日が来るといいけど」

あまりの突飛な話に5人はとまどう、映画かおとぎ話のようなシーンが目の前で展開されている、でもこれは現実なのだ。

「未来へ行ったらもう帰れないの？」
「そうね。でも1回だけ帰るチャンスをあげる。あなたたちだって心配でしょ、未来へ行ってからだまされた、帰れないじゃ」

再び5人は顔を見合った、自分から言葉を発するのが怖くて誰かが口を開くのをそれぞれが待っていた。

「そんな大切なことすぐには決められない」
「もっともね、じゃ考える時間をあげる、1時間後に答えを聞かせ

てね、１度きりのチャンスだから自分で決めるのよ」

「あっまた消えた・・・」

選択

8　選択

教室の中を静寂が支配する。
5人とも何かを口にしたくてもできない。驚きはもちろんあろう、しかし心の大半は戸惑いであり迷いである。自分は今2枚のカードを与えられた、「残るか」「行くか」そしてそのカードの1枚は自分の人生を、自分の夢を、自分の手で叶えられる魔法のカードなのだ。そしてそれをわずか1時間という時間の中で決断しなければならない緊張とあせり、誰もが自分の心の中で葛藤していた。
重い口を最初に開いたのはユカ。

「みんな、どうするの」
「どうするって、どうする？」
「ウルシ！真剣に！」
「めちゃくちゃ真剣だよ、オレ」
「冷静に考えましょう、未来へ行ったらどうなるの」
「自分の夢が実現している」
「私たち5人はそれぞれどうなってるの、別れ別れになって友達でいられないの？それじゃいやだわ」
「いや、ネックレスに触った人以外の記憶から消えるって言ってた、つまり全員が触れば僕らの記憶は消えないはずだ」
「しーちゃんと教授の問答すごく明快・・お願い続けて。あたしも頭整理する」
「家族は？」
「現代では記憶から消える・・でも未来では未来の自分を受け入れてくれる」
「私たちの今の記憶は残るの？未来で成功していても今までの思い

出が全てなくなるのはいや」
「それは・・言ってなかった」
「どうするの」
「こんなこと1時間で決めるのなんて無理だよね」
「時間を延ばしましょう」
「えっ、時間を延ばすって、しーちゃんも実は未来人なの」
「ユカ、真剣？それともボケてるのか？」
「真剣に決まってるじゃない」
「あの子はこう言ったわ、自分の手で身につけた瞬間に未来へ跳ぶって、それからネックレスに触れた人はお互いの記憶が残るって」
「たしかにそう言ってたね」
「ちょっとずるいけど、ひとまず全員が未来へ行くと答える、全員がネックレスに触るわ、その時点で私たちはお互いの記憶をキープできる。つけるかつけないかはそれからじっくり考えればいいじゃない」
「すごーい、しーちゃん」
「でも、そんなこときっとお見通しじゃないかな、ぼくたちのこの会話だって全部聞かれてるに決まってるよ」
「いいじゃない、もともとが狐に化かされたような話だわ、未来へ行くチャンスがなくなったからって現状に戻るだけじゃない」

考える時間が手に入る、今までのどうしたらいいかわからない混乱の中で、その可能性が示されただけで全員の心に安堵が宿った。

（さすがはしーちゃんだ。あたしだけならうろたえてきっと何も行動を起こさないまま終わってた）

「じゃ、そういうことでいい？」
「了解」

時計の針がタイムリミットを示す。
全員が一斉に腕時計に目を落とした瞬間・・・
少女は三たび、同じように姿を現した。5人は今度こそ現れる瞬間を見ようと構えていたが一瞬の出来事にそれは叶わなかった。

「どう、答えは出たかしら」
「私たち未来へ行きます」
「そう、わかったわ、それじゃ一人ずつネックレスを渡すわね」

しーちゃん、ウルシ、教授、ロク、そしてユカ、1人ずつその手にネックレスが手渡される。銀色のチェーンに1ミリ程度であろうか、ガーネットのような真っ赤な宝石をあしらったペンダントがついている、見た目はなんてことのないネックレスだ、重さはほとんど感じない。

「確かに渡したわ、上手い作戦だったわね」
「やっぱりわかってたの？」
「もちろんよ」
「じゃ、何で？」
「これであなたたちの記憶は消えない、でも実はここからが本当の決断よ」
「えっ」
「あなたたちは1度ネックレスを手にしてしまった、使うか使わないかはあなたたちの自由、でもどう、誰かが使って誰かが使わなかったら」
「あっ」
「そう、どちらにしても友達を失うことになる。記憶は消えないからね。仲良し5人組がばらばらになるかもしれないのよ」
「そうか、しまった！そこまでは考えなかった！お前性格悪すぎ」
「チャンスの裏側には必ずリスクが存在するわ、覚えておくといい

わね」
「そんなこと・・・」
「私はこれで消えようと思うんだけど何か聞きたいことはある？」
「ありすぎて何から聞いたらいいのか・・」
「大事なことだけ伝えておくわね」
「大事な・・こと」
「ネックレスは今から２４時間だけ力を持つ。それを過ぎればただのオモチャ。その瞬間に私の事もすべて忘れるから」
「２４時間・・」
「それから、ここにいる５人以外の誰かに１人でもこのことを話したら、その瞬間に全員のネックレスは効力を失うわ」
「あなたたちはこれから２４時間きっと苦しみ迷い続けるわ、人生はとても重いの、自分の人生と向き合って、自分の意思で選ばなければいけないの」
「・・・・」
「そうそう、１つ大切なことを忘れてたわ、はいこれ」
「何？」
「指輪？」
「ネックレスを使って未来に行った後、帰りたくなったらその指輪をはめるといいわ、１度だけ帰ってこられるって約束したものね。もっとも帰るってことはたった１度のチャンスをつかんだ未来での成功を捨ててくることになるけど」
「ねっもっと聞きたいことがある、いっぱい」
「残念ながらここまで、ほら７時までに帰らないと家族が心配するわ、さようなら」
「待って！・・・」

再び沈黙が教室を包んだ、全員があまりにも重い宿題を抱えて家路につかねばならない。

「明日の正午、場所は神社・・・」

ウルシの声が静かに今日の終わりを告げた。

迷い

9　迷い

「行く」か「とどまる」か

「使う」か「使わない」か

5人は人生という長い道の分岐点にいきなり連れてこられた。

山の頂へと続く険しい山道を登ることが人生ならば、一方の道を選べばそこには真新しいロープウェイが待っている。それは何の苦労もなく快適に頂上に連れていってくれる。そして、頂上は間違いなく澄み渡った青空なのだ。そこから眼下の景色を眺めるのはさぞかし気持ちのいいことだろう。

もう一方の道は見るからにくねくねと折れ曲がり先が見えない。途中で雷に遭うこともあれば、足を滑らせて転び傷を負うこともあるかもしれない、行き先を見失い暗い森を淋しくさ迷うこともあるだろう。しかも、苦労してようやくたどり着いた山頂が晴れているとは限らないのだ。

だれだって、楽な道を選びたくなる、だれだって晴れた頂に立ちたい。

（みんなはどうするんだろう）

（あたしとちがってみんな夢を持ってる、もしあたしだけが残ることになったら・・あたしはひとりぼっち・・）

ユカは迷う。自分もみんなと同じ道を選べば・・

でも、何か違う気がする。「夢は人から与えられるものじゃない」マスターの言葉がずっと心に引っかかっている。自分にはまだはっきりとした夢がないから、それはきれい事なの？いや、やっぱり違う、山を登る途中で汗をぬぐいながら飲む水筒の水のおいしさ、道端にふと見つけた花の美しさ、そして何よりも頂上にたどり着いた時の言葉では言い表せない喜び、まだ短い人生の中でユカにもそんな体験があった。たとえ天気が悪くても、そこで広げて口にしたおにぎりがどれだけ美味しかったか。

選べる道は１つ。

「全員そろったな、いい場所を見つけた。神社の集会所のカギが壊れてる、あの中なら落ち着いて話せる」

木造の古い集会所は扉を閉めても蝉時雨が微かに忍び込む、曇りガラスでは防ぎきれない夏の日差しが部屋の中を白く照らしている。湿気がないせいか、思いのほか暑さを感じないのが救いだ。

「夕べはほとんど眠れなかったわ」

「志水さんも？僕も同じだ、こんな気持ちで過ごした夜は生まれてから始めてだ」

「オレもだよ、で、みんなどうするんだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「私、悩んだ、本当に苦しかった。でも、決められない、みんなの気持ちを確かめないと・・・」

「オレも考えた、生まれてからこんなに考えたことないくらい考え

た」
「で、結論は」
「みんな一緒なら・・・行ってもいいかなって・・」
「えっ」
「だって、夢を手にできるんだろ、それに家族を悲しませることもないし、未来では今までと同じように家族だし、それに、ほらみんなとだって一緒にいられる、ただ。単に大人になってるだけかなって」
「私も、みんなと一緒なら・・どうしてもミュージカルの舞台に立ってみたい」
「僕も悩んだ、でも一度は帰ってくるチャンスがあるんだ、ならば、自分の未来を見てみたい・・そんな気持ちも強くなってる」
「教授・・・」
「そうだよ、オレたちは帰るチャンスを持ってるんだ、行ってみない手はないぜ」
「そうよね、私たち、今世界で誰にもできない体験をできるかもしれない」
「うん」
「なんだか方向が見えてきたみたいだね」

曇りガラスの向こうでは緑の木々が風に揺れているのがわかる、蝉時雨の音が静かな空間に5人の決意を後押しするかのようにひときわ大きく響き渡った。

「ね、ちょっと待って」
「何？ユカ」
「あたしは・・・残る」
「えっ？」
「あたしは行かない！」
「あたしもずっと考えた、一晩中考えたの、あたしはみんなと違っ

てはっきりとした夢がないからかもしれない、でもなんか違うと思うの」

「何がどう違うんだい？」

教授が戸惑いながらも、努めて冷静に尋ねる。

「夢って、誰かに『はい』って渡されて叶えるものなの？何の苦労もしないで手に入れるものなの？そんなの夢でも何でもないよ。もし、未来へ行ってウルシがプロ野球の有名選手だとしても、しーちゃんがミュージカルスターだとしても、教授がノーベル賞を獲るような学者だとしても、あたし、喜べない！今までとおんなじようにみんなと話せない！そんなのさびしいよ！！」

「ユカ・・」

「夢は・・夢は・・大変だけど叶えるまでが大切なんだよ、頑張るから叶ったときにきっと嬉しいんだと思う、できなかった時には悔しいんだと思う、だから涙も出るんだよ、みんな！目を覚まそうよ！！」

ユカは涙を止められなかった。自分は今もしかすると仲間たちの夢をつぶそうとしているのかもしれない、自分のわがままなのかもしれない、でもあふれ出る言葉は自分の意思とは関係なしに次から次へと胸の中から湧き出してくる。

「あたしもちゃんと夢を見つける！みんなと同じように夢を見つけて頑張る！だからお願い、一緒に頑張ろうよ！くじけそうになったらあたしを助けて！」

「・・・」

「・・・」

「そうだよな・・・確かに努力しないでいい思いしたってつまんないよな」

「ウルシ・・」

ユカが涙をぬぐいながらウルシを見つめた。

「ユカ、ごめん、ありがと、私目が覚めたわ、目の前のおいしい未来に手を伸ばそうなんて、なんか恥ずかしいな」

「しーちゃん」

「僕も考えさせられました、篠宮さん、感謝します」

「教授・・」

「みんな、ごめん、あたし、みんなの夢の邪魔をしようとしてるんじゃないの・・・」

ユカは再び泣きじゃくりながらくずれおちかける、しーちゃんがしっかりとその体を受け止めてささやいた。

「ユカ、大丈夫よ、だれもユカが私たちの夢を邪魔しようだなんて思ってないから」

「もう泣くな、お前が正しい」

「篠宮さん、よく言ってくれました」

それぞれの胸に安堵が芽生えかけた時、その芽は突然冷たい水をあびせられ凍りついた。

「ぼ、ぼくは、行くよ」

決断

１０　決断

「えっ」
「ロクちゃん・・」
「ロク、今何て言った？」

ロクは落ち少し興奮したように顔を赤らめ、しかし確かな口調で言い放った。

「ぼくは未来へ行く」
「ロクちゃん、どうして？１人で行ったら離れ離れになっちゃうんだよ」

ユカが確認するようにロクを問い詰める。

「そうだよ、僕たち今、篠宮さんの言葉ではっきりわかったんだ、自分たちで努力して夢を叶えようって」

しばらくの沈黙の後、ロクは今までに見たことがないような厳しい目で４人の顔を順番に見つめた。

「みんなはいいよ、志水さんだってウルシだって、教授だって、きっと努力すれば夢が叶う、でもぼくは違う、ぼくはだめさ、いくら頑張ってもみんなのようにはなれない」

しーちゃんは必死に説得を試みる。

「園田くん、そんなことない、園田くんだって頑張ればできるわ」
「ぼくだって頑張ってる、自分でできることは頑張ってるんだ、でも、結果はオールDさ、才能のあるみんなにぼくの気持なんかわからないよ！」
「ロク、考え直せ、お前がいなくなるのなんて耐えられないよ、サマーキャンプはどうする、みんなで最後に優勝するんだろ」
「ぼくは決めたんだ、1人になってもいい、今までずっと悔しい思いをしてた。だからうんと才能のある大人になって、自分の思うように生きる、お母さんに立派な家を建ててあげるんだ」
「ロク！」
「ロクちゃん！」

凍りついた空気は嵐のように小さな小屋の中を吹き荒れていた。1度は溶けかけた固い氷が今や大きな塊となってロクと4人の間に氷河のように横たわっている。もう誰も溶かすことはできない。

「ロク、もう1度だけ言う、一緒にいよう」
「ウルシだってついさっきまで行く気満々だったじゃないか、説得力ないよ」
「そ、それは・・みんなで一緒に行くならって考えたんだ、1人なら行こうとは思わない」
「それこそ、中途半端じゃないか、みんなで行くとか、行ってみて帰るとか、ぞれもこれもウルシはどっちに転んでもいいって考えてるからだよ、でもぼくはわかったんだ、ぼくが夢を叶えるにはこのチャンスをものにするしかないって、だから、ぼくは・・1人でも行く！」

「ロクちゃん、本当に行っちゃうの？考え直せないの」
「うん、ユカちゃん、今までいろいろと相談に乗ってくれてありがとう」
「ロクちゃん・・・」

今のロクを止められないことを４人は悟った、と同時に今まで時には自分たちに愚痴をこぼしていたロクがここまで真剣に悩んでしたことも。

ロクは小さな部屋をみんなから遠ざかるように１歩１歩後ずさる。そして、最後の１歩である右足を壁にぶつけたと同時に、ポケットからネックレスを取り出す。それからひとつ大きな深呼吸をした後ゆっくりと自らの手でそれを首につけた。

「みんな、さようなら」

瞬間、部屋の中が暗闇に飲み込まれる、そして回る、回る、回る。まるで宇宙空間を疾走するジェットコースターのように、それはおそらく数秒間の出来事、でもユカたちにはその何倍の時間にも感じられた。やがて、再び静寂が訪れる。

「・・・」
「ロクちゃん、行っちゃった・・・」
「私、知らなかった、園田くんがあんなに悩んでたなんて、それなのにオールＡ取ったとか言って、どれだけ園田くんの気持ちを傷つけたか・・・ごめんなさい」
「泣かないで、志水さん、僕らなんでも本気で言い合えるから仲間だったんじゃないか」
「そうだ、気にすることないさ」

「あっ、何あれ？」

部屋の少し高い天井から舞い降りてくるものがある、それはボタン雪のようにゆっくりと畳の上に落ちた。

「見て、ロクの事が書いてある！」

「み、未来の新聞だ・・・」

＞　園田　禄氏　世界建築コンペ優勝　＜

「やっぱりあいつの話は本当だったんだ」

「さびしいけど、ロクちゃんのためにはよかったのかも・・・」

「ロクは、自分で自分の人生を選んだんだ」

「・・・」

「あら、もう1枚ある」

「えっ、大変」

＞　建築家　園田氏　狙撃され重体　＜

「何だって！」

『世界的に有名な建築家、園田禄氏が講演先の海外で何者かに狙撃された。仕事上でライバル関係に当たる外国企業が関与か、園田氏は意識不明の重体で・・・』

「ロク！」

「こんなことってあるのかよ！」

「ロクちゃんが死んじゃう！」

「園田くん！」

「思わぬ展開になったわね」

「あっお前、いつの間に」

「結局園田くんが一番勇気があったってことかしら」

「あなた、私たちをだましたのね、この記事は何、園田くんがこんなひどい目に遭うなんて一言も言わなかったじゃない」

「だましてなんかないわ。私はあなたたちの夢を叶えてあげると言っただけ。園田くんは夢を叶えたわ、成功したのよ。でもそのあとどうなるかは自分次第、成功したあとのことまで私は話した？」

「サギだぜ、そんなの」

「チャンスの裏側にはリスクが存在する、これは教えたわね、もう1つ教えてあげましょう、計画通りに進む人生なんてないの、自分の人生は自分で責任を持つしかない。園田くんは自分で未来へ行く道を選んだ、選んだ以上その結果も自分で責任を負うしかないのよ」

「そんな・・・」

「あなたたちもよく考えて道を選ぶのね、少なくとも今のあなたたちには選ぶ権利と自由があるんだから。それさえなかった時代があったこと、社会科で習ったでしょ」

「・・・」

「このあと、どうするのかしら、ま、私の出る幕じゃないけど・・・さよなら」

覚悟

11　覚悟

真夏の乾いた空気が蝉時雨の声とともにかすかに忍び込む。沈黙が再び部屋の中を支配する。誰もが言葉を失う中、ユカも戸惑い続けていた。

（あたしたち、もう後戻りができないところにきたのかもしれない・・・）

教授が重い口を開く。

「とんでもないことになったようだね」

「どうしたらいいのあたしたち」

「もう一度冷静に考えましょう」

しーちゃんが自分自身を落ち着かせるかのようにゆっくりとみんなを見つめて言った。

「ああ、オレたちはサマーキャンプの計画を練ってた、そこへあいつが現れた」

「そして、夢を叶えてくれるといった」　教授が確認する。

「どうしてオレたちはそんなこと信じたか」

「地震を予言したからだわ」ユカの眼が大きく見開く。

「おれたちはあいつを信じて未来の成功を手に入れようと考えた」

「でもユカが最後のところで止めてくれたわ」

「でも、ロクは止められなかった」

教授の言葉に一瞬の沈黙が・・・

「オレたちははっきりわかったんだ、くさいセリフだけど夢は自分の手で叶えるものなんだって」

「何となく見えてきたね、僕たちにできることを僕たちの手で努力すればいい、いや、努力しなくちゃいけない」

「そうだけど、それは今までと同じことじゃない」

「うん、でも篠宮さん、僕らがしなくちゃいけない努力ははっきりしてる」

「わかった！ロクちゃんを連れ戻すこと！」

「そう、何が何でもロクを助けるんだ」

「うん！」

「で、オレたちどうすればいい？」

「答えは一つ、僕たちも未来へ跳ぶ」

「えっ、それは・・」

ユカが教授の顔を見て戸惑いの表情を見せる。

「篠宮さん、勘違いしないで、僕らが未来へ行くのは夢を手にするためじゃない、ロクを救うためだ、だから・・必ず帰ってくる」

「そうだ、まだネックレスに触れてから２４時間経ってない、今ならまだ間に合うぜ」

「そうだわ、そして帰ってくるチャンスも１度だけ残ってる」

「・・・」

ユカはまだ不安を拭いきれない。

「でも、行った先でどんなことが待ってるかわかんないよ、お互いのことだって覚えてるかどうか・・」
「うん、でもぼくらにできることがほかにあるかい？このままロクがいないまま毎日を過ごしていけるか」
「そんなの絶対いや！」
「じゃ、覚悟するしかない、そしてお互いを信じるんだ、４人が信じあって、１人１人ができる限りの努力をしてロクを連れ戻す」
「みんな、どう？」

教授が決断を迫った。そして、この決断には大きな覚悟が必要だ。

「・・・」
「私、やるわ、園田くんが悩んでいたのに気付かなかった私がいけなかったの」
「さすが志水さんだ、おれも行くぜ、ユカは」
「あたしも・・行く」
「よし、決まりだ」
「よし、みんな手を出せ」

４人は両手を出し合い、お互いの手のぬくもりを感じあう、１人では持ちきれなかった勇気が少しずつ４人の手を伝わりふくらんでいくのを感じた。

「ねぇ、未来に行ってもあたしたちわかりあえるよね」
ユカがすがるような目で教授を見つめた。
「そ、それは行ってみないとわからない、記憶は残ると言ってたけどそれは現在の事だから」
「全員、同じ場所に傷をつけましょ、きっと何年たっても忘れないわ」
「こわっ！」

「志水さんの気持ちはわかるけど女の子に傷をつけるなんてできないよ」
「あたしから提案」
「何、ユカ」
「気休めかもしれないけど、おまじない、これ」
「レモン？」
「うん、リムーでもらったエメラルドレモン、気持ちが動揺した時に冷静になれる魔法の薬なんだって」
「1個しかないの？」
「うん、だから・・・」
「よし、順番にかじろう」
「いいね、じゃおれからだ」

4人は順番にゆっくりとレモンをかじる。

「すっぺー」
「次は私ね・・きゃー刺激的」
「おお、これは・・・」
「最後はユカよ」

ユカは全ての想いをこめてレモンをかじる、ちいさなしぶきが顔の前ではじけるのがはっきり見えた。

「うー、こりゃたまりません」
「ユカの顔おばあちゃん」
「失礼ね」

4人の笑い声が部屋の中に響く。
（何だか久しぶりに心から笑った気がする）ユカはうれしかった、心の底では本当は怖かったんだ、でもみんなとなら勇気を振り絞れ

る、そんな気がした。

「最後にもう一度確認しよう」
「確認て、何を、教授？」
「これから先はどうなるか、わからない、みんな一緒に行動できるのか、それともバラバラになるのか」
「うん」
「たとえ、1人になろうとも目的はただ1つ」
「園田くんを救うこと」
「そうだ、もしかすると全員で帰れないかもしれない、たとえ、そんな場面に出くわしてもこの目的を忘れない、ロクはこのままだと死んでしまうかもしれないんだ、つらくてもロクの命を助ける、それだけはみんなで心に誓おう」
「よし、わかった」
「うん」
「ええ、わかったわ」
「よし、準備はいい、みんなネックレスを出して」
「僕が3つ数える、3つ目でネックレスを付けるんだ、いいね」
「OK」
「みんな目をつぶって・・」

「1・・」
「2・・」
「3！！」

未来

12　未来

「ユカ、起きなさい、時間よ」

長いまどろみから覚めたようなぼんやりとした感覚、それは風邪をひいて熱を出し、ずっとふとんにくるまれていたあと、寝汗とともに回復した体を久しぶりに起こす。そんな感覚にも似ていた。

「ユカ、7時よ」
「ハ、ハハ？」

目を開けるとそこには見慣れた顔、でもちょっとした違和感、白髪混じりの髪と少しやせたように思える「ハハ」の顔は優しい面持ちは変わらずとも明らかに時の流れを映しだしていた。

（み、未来へ来たんだ・・）

「大事な入社式に遅れたらどうするの」
「入社式？」
「何、寝ぼけてるの、夢だったアナウンサーの記念すべき初日でしょ、しっかりおめかしして行きなさい」
「アナウンサー？あたしが？」
「ほんとに大丈夫、大学院に行ってまで手に入れた夢でしょ、さ、早く支度しなさい」

（あたしは、未来に来たんだ、本当に来たんだ。そして記憶は・・昔のまま・・）

（えい、落ち着け、冷静にならなくちゃ）
（ロクちゃんを助ける、記憶が昔のままならきっとできる、でも今の事がわからない・・）
（でもやるしかない、覚悟してきたんだもの）

ユカは混乱する頭を整理しながら、ベッドから体を起こす、そして顔を洗った後はハハに言われるままに着替えを済ませた。生まれてこの方着たこともないスーツに身を包み、ユカは初めて未来の自分を鏡に映す。

（これが、あたし・・）

そこには紛れもなく12年後の篠宮由香の姿があった。

（自分じゃないみたい・・・）
（あっネックレス）

ユカの首にはあの時のガーネットのネックレス。
「ゆ、指輪は！」
「あった」
机の上のガラスの皿の上にあった指輪をユカは鞄の中のポーチに大事にしまった。

（これだけは・・常に持ってなくちゃ）

「おめでとう、ユカ」
「あっ、チチ」
「今日からテレビでユカを見られると思うと楽しみでいつもより早く起きちまったわい」
「何言ってるのおじいちゃん、入社1日目からすぐにテレビに出る

わけないでしょ」
「じいちゃん、昔とあんまり変わんない」
ユカは未来へ来て初めてクスッと笑った。
「何なの昔って、さっ朝食にしましょう」
「ね、入社式の案内は？」
「夕べカバンにしまってたじゃない、１０時からでしょ」
「あっあった」
『テレビ瀬戸内　入社式　於　本社ビル　９時半までにご来場ください』
（とにかく、なるようにしかならない、行くしかないよね、でもよかった・・地元で。知らない場所だったらロクちゃんを探すどころじゃないもの）
（あたし、できる、順応性あるんだから、わからなかったら何でも聞いちゃえばいい、ロクちゃんを助けるためなら何だってやる）
ユカは自分で自分を叱咤するようにほっぺたをつねってみた。頬に感じた痛みは今が夢ではなく確かに現実だということをはっきりと物語っていた。
「じゃ、行ってきます」
「行ってらっしゃい、気をつけてね、今晩はお祝いにあなたの好きなトマトシチューで待ってるわ」
「ありがと、ハハ」
「ユカ、がんばれよー」
「じいちゃん！うん、行ってきまーす」

小さな庭を抜け、昔ながらの格子戸をくぐりユカは朝日の中を飛び出す。

「あっ、がらくた館！」

家を出たユカの目に飛び込んできたのは「がらくた館」だ。

（まだあったんだ、よかった・・・マスター元気かな、まだ開店前か・・）

坂道を港のそばの駅に向けて早足で歩くと分かれ道にはやはり見慣れた店が。

「リムーもある！あっおじさん！」
「サラーム　ユカちゃん」
「サラーム　おじさん　ちょっと老けたね」
「何だい、昨日会ったばかりじゃない、今日は入社式だっけ」
「うん、何だかわからないけどそうみたい」
「ほれ、お祝い、持っておいで」
「あっエメラルドレモン」
「緊張した時に紅茶に入れて飲むといい、リラックスすること間違いなし」
「ありがと、感謝」

手を振るおじさんを背中にユカは眼下の町を眺める。そこには昔と変わらぬ町並、青い海と緑の小島、連絡船が忙しそうに行き交うミニチュアのような光景が広がる。ユカは心から安堵する。

（あたしの町はずっと変わっていないんだ）

この景色がこれからめぐり会うであろう予想もしないさまざまな出来事に対する不安を打ち消してくれる何よりの強い味方のような気がした。

（みんなはどうしたんだろう・・・）

（会場までは３０分ぐらい、まだ時間がある、どうしたらいい？）

「そうだ、携帯だ！」

ユカは思わず声に出した。

（きっと携帯にみんなの連絡先があるはず）

ユカは鞄の中に携帯を探す。

手の平に隠れるほどの小さくてお洒落なガラスの板のようなものが、目に入る。

「これかな」

手に持った瞬間に透明なガラス板は一瞬にして通信機のような映像を表面に映しだした。

「ひぇ！進化してる　薄いし軽いし」

「どうやって使うんだろ」

「複雑でわかんないよ、もうこうなったらヤケだ」

「志水佳澄！」

ユカはしーちゃんの名前を携帯に向けて呼んでみた。

「あっ、出てきた！さすが未来」

ガラスの表面には名前と大人になったしーちゃんの顔が立体的に浮かび上がった。

「しーちゃん、すごーい！大人っぽい」

「えーと、次は・・・内山京司！」

教授の顔が同じように浮かび上がる。

「教授だ。あんまり変わってない、メガネがちょっと派手じゃない、教授のイメージとちょっと合わないかな」

「そして最後は・・・漆山　航！」

ユカはウルシの名前を呼んだ。

「あれっ？」

「名前間違えたっけ」

「もう一度、漆山　航！！」

ユカは一度目よりも大きめの声で携帯に向かってウルシの名前を呼んだ。しかし、時間がたってもウルシの顔が浮かび上がることも、名前が現れることもなかった。

「どうして？ウルシが出てこない・・・」

はじまり

１３　はじまり

「もしもし、しーちゃん」
「もしもし」
「しーちゃん、あたし、ユカ」
「ユカ？連絡待ってたわ。さっき教授からも電話があったの」
「記憶、もとのままだったね」
「そうね、ユカは何してるの」
「聞いて、あたしテレビ局のアナウンサーになってた、しーちゃんは」
「うん、劇団に入って、夏の公演の主役よ、来週から舞台稽古が始まるらしい、日記に書いてあったわ、自分の日記を見て知るなんて何だか変な気持ち」
「あたしもこれから入社式に行くところ」
「そう、とにかくみんなで会いましょう。今日はお互い無理ね。明日は土曜日だから１０時に神社で、教授もＯＫだって」
「うん、わかった、あっウルシは」
「それが携帯に連絡先がないの、ユカは」
「あたしも、どうして？」
「わからない、でも仕方ないわ、とりあえず３人で」
「了解、今日１日うまくやってね」
「ええ、ユカもね、自分自身の役をやるなんてミュージカルでもめったにないわ、演技の練習と思って頑張ってみる」
「じゃ、そろそろ行かないと遅刻だから」
「それじゃ」

（よかった）

ユカはひとまず安堵した。町並も家族も昔と変わらずに自分を迎えてくれた。あの子の言った通りだった。しかし、現実とは大きな隔たりがある。本来なら輝かしい未来での新しい毎日のスタート、胸をときめかせる人生の幕開けだろう。けれども２４歳の体に１２歳の心、そこにはとまどいと不安がよぎる。

何よりも４人にはロクを救うという大きな宿題があった。ユカは気を引き締め直し駅への坂道を駆け下りた。

目の前には１０階建てぐらいだろうか、大きなビルの入り口にひっきりなしに多くの人々が足早に吸い込まれていく。

「おはようございます、新入社員の篠宮です」

「おはよう。こりゃ偶然だ、アナウンス部の久本です、面接の時に会ったね、覚えてる？」

「あ、いえ・・・緊張してたんで」

「そうだな、こちらへどうぞ、一緒に行こう」

「あの、入社式は・・」

「ああ、詳しいことは知らせてなかったね、入社式といっても会社全体でやるような儀式はないんだ。なにしろ地方の小さなテレビ局だから忙しくてね、それぞれの部署で独自に新入社員を迎えるというわけだ」

「そうなんですか」

「アナウンス部の新入社員は君ひとり、歓迎するよ」

「えっあたしひとりだけ？」

「そう、地方局といえども倍率は１００倍だぞ、よく頑張ったな」

「ひ、ひゃくばい！」

「応募の時にわかってただろ」

「あ・・はい」

「ここだ、さ、入って」

「はい」
「部長、新人アナウンサーの篠宮さんです」
「し、篠宮です、よろしくお願いします」
「峰岸です、ようこそアナウンス部へ」
「女性の部長さんなんですね」
「めずらしい？」
「い、いえ、かっこいいですね」
「あら、ありがと、じゃ入社式といきましょうか」

小さな部屋のブラインドがすっと上がるととたんにまぶしいまだ若い朝の光があたりを温かく包みこんだ。

「では、あらためましてようこそテレビ瀬戸内アナウンス部へ、じゃみんな自己紹介」
「アナウンス部次長の久本だ、よろしく」
「原田です、６年目で朝のニュースを担当しています」
「山梨といいます、僕は４年目、しばらくの間はぼくについて勉強してもらうのでよろしく」
「あと一人は今仕事中、お昼のニュースの打ち合わせ、ほらあそこを見て、スタジオの中にいるわ」

ガラス越しのスタジオの中からヘッドホンをかけたかわいらしい女性が手を振る。マイクを通して声が飛んで来る。

＞久保木恵です、よろしくね＜

「篠宮由香です、よろしくお願いします」
「以上。あなたを含めた６人で全員よ」
「少なくて驚いたろ、この春に１人結婚退職した子がいて君がその後任だ」

「大きなテレビ局なら何カ月もかけて一人前に育てるのでしょうけど、ここでは即戦力になってもらうから覚悟してね。今日はこのあと局を案内して一通りの事を教えます。分厚いマニュアルをプレゼントするからこの土日で全て覚えて来ること。来週からは研修を兼ねて山梨君の取材に同行してもらうから、仕事を覚えていってね、いいかな」
「は、はい！」
「よろしい、がんばってね」

心臓の鼓動が指先まで伝わってくる。あたしがアナウンサーに・・・12歳のあたしはまだ夢も持てず、はっきりとした夢を描いて頑張る仲間たちから取り残された気がしていた。

（これがあたしの未来・・ううん、現在・・）

何もかもが新しく、何もかもが驚き、時を越えていきなり飛びこんでしまった大人の世界にユカは戸惑う。

（これが大人の世界なんだ、挨拶1つでもテキパキとして、みんななんて素敵なんだろう、なんて輝いてるんだろう）

1日があっという間に過ぎる、こんなに早く流れる時間をユカは初めて体験した。見学するスタジオも、そこで生き生き働く人々の姿も、峰岸部長から聞く話のひとつひとつも、全てが新鮮な驚きに満ちていた。

「さっこれで一通りの事は教えたわよ、何か質問はある？」
「い、いえ、何から聞いていいのか・・」
「はは、そりゃそうね、わからないことは聞く、初めは何を聞いても恥ずかしくないわ、そのかわり1度覚えたことは忘れましたじゃ

許されない、それが仕事の世界よ、わかった」
「はい」
「じゃ、7時だし今日はこれで帰っていいわ、はい、これは今日の話をさらに詳しく書いたマニュアル、月曜日までの宿題だから、しっかりと覚えて月曜日に今日と同じ時間に来てちょうだい」
「わかりました、さようなら、じゃなかった　失礼します」

１４　再会

長い石段を登る、少し登っては振り返り確かめるように眼下の町並みを眺める、次第に開けていく視界、石段を登りきった鳥居にもたれながらユカは大きく１つ深呼吸をした。

「ユカ」

背後から聞き覚えのある声がした。

「しーちゃん！」

「ユカ素敵、１２年ぶりなのかしら、それとも2日ぶりなのかしら」

「しーちゃんもまるで別人、でも声は変わってないね」

「お待たせ」

「教授！」

「何だか自分じゃないみたいで照れくさいんだけど」

「大きくなったね、見上げるくらい」

「派手なメガネ、ちょっと似合ってないよ」

「今の流行らしいよ」

「教授の未来はどうだったの」

しーちゃんがうれしそうに笑顔で問いかける。

「うん、大学院で宇宙工学の研究をしている、子供の頃の、いや、二日前の僕が思い描いていた通りの未来になってたよ」

「ウルシとは連絡取れた？」

「いや、携帯に連絡先はないし、こっちに連絡も無い」

「何でなんだろ、あたしたちはこうして会えたのに」

ユカが首をかしげてみせた。

「わからないわ」

「連絡先がないと知ってからすぐに調べてみたんだ、僕たちが夢を

叶えたようにウルシもプロ野球の選手としてきっと成功してるはずだ、ネット上で検索すればきっとわかると思ってね」
「で、どうだった？」
「すぐに出てきたよ」

教授は取り出した携帯端末のガラス盤の１箇所を軽く指でたたいた後、そこに向けて呼びかけた。

「ウルシヤマ　ワタル」

硝子盤はしばらくすると画面に映像を映し出した。

「声で簡単に検索できるんだ、何万件とヒットしたけどトップに出てきたよ、ほら」

教授がガラスのスクリーンを2人に見せると、精悍とした顔つきのピッチャーがダイナミックな投球フォームで目にも留まらぬ速球を投げ込む姿が立体的に浮かび上がった。

「ウルシだわ、なんか、かっこいい」
「ホント、でも間違いなくウルシ」

《漆山航　２４歳　プロ野球山陽ドルフィンズ　投手　私立聖海学院高校から聖海大学卒業後、ドラフト１位指名にて入団、持ち前の速球と勝負度胸のよさで１年目から活躍、１４勝を挙げ新人王を獲得、２年目も１５勝を挙げて、長年低迷を続けてきたドルフィンズを2位へ躍進させる原動力となる、入団３年目の今年は念願の優勝に向けて更なる活躍が期待される》

ＤＪ風のナレーションが読み上げられた後、立体映像はウルシの

投球フォームを映し出し、続いて自己ＰＲが流れた。
「ドルフィンズの漆山航です、今年は優勝目指して投げまくります、みなさん応援よろしくお願いします！」
ウルシの笑顔を最後に映像は終わり、ウルシの顔もスクリーンの中に戻り動きを止めた。
「カッコイイ！」
ユカが指を鳴らしてみせた。
「やっぱり夢の通りね」
「うん、ドルフィンズはずっと弱かったから全国的にはまだまだらしいけど、地元じゃ知らない人はいないくらいのスターだ」
「すごいわ」
「それから、志水さん、もうひとついい物を見つけたんだ」
「何？」
「ほら、これさ」
《新春特番　ドルフィンズ期待のエース漆山航選手、新進気鋭の建築家園田禄氏、地元出身の若手２人にロングインタビュー》
「ロクちゃんだ！」
「２人は地元出身の期待の若手として今年のお正月にインタビューを交えて対談してるんだ」
「じゃ、ロクちゃんと会うのも簡単ね」
「でも、どうしてウルシは連絡してこないのかしら」
「うん、そこがわからないんだ」
「それが謎よね、教授でもわからないなんて」
「僕らの記憶はこうして残ってるし、たとえ何かの理由で携帯に連絡先が無いとしても、何らかの方法で僕らを探さないはずは無い」

「有名人だしきっと連絡したくても出来ないんじゃないのかしら」
しーちゃんがしごくもっともな理由を口にした。
「それは一理ある、でも志水さん、僕たちが未来へ来たと理解した瞬間、最初に思った事は何？」
「うん、確かに最初は驚いてしばらくは混乱したんだけど、とにかくみんなに会いたかった、話したかった」
「僕も同じだ」
「私も！」
ユカが勢いよく手を挙げる。
教授はしーちゃんを見ながら話を続けた。
「だからウルシが連絡してこないわけはないんだ、絶対に！」
「しばらくは待つしか・・ないのね」
「それから・・・」
「何？」
「僕はもう1つ大変な事に気がついた」
「えっ大変な事って？」
「志水さん、あの日の新聞のこと覚えてる？」
「あの日って、神社に集まった日？」
「ロクちゃんが撃たれるって記事・・」
ユカが話に割って入った。
「そう、それで僕らは決心したんだよね、ロクを救うために未来へ行こうって」
「ええ」
「うん」
ユカとしーちゃんはお互いに顔を見合せた後、確かめ合うように同時に返事をした。
「篠宮さんはあの時の新聞の日付、覚えてる？」
「ううん」
「僕はとっさに日付を見た」
「いつだったの？」

「それが・・9日後の4月11日」
「えっ！ホント」
「うん、年号も日付も僕の頭にはっきりと残ってる」
「つまり、あの・・教授、どういうことになるの？あたし、頭がこんがらがってわかんなくなっちゃった」
ユカは人差し指を頭の上で渦を描くように回して見せた。
「うん、あの時の新聞記事には前日の朝に日本を発ったと書いてあった、4月10日だ。だから、7日後、つまり来週の土曜日、4月9日までにロクに会って何としてでも引き止めなくちゃならないんだ、外国に行かれたら今の僕らにはどうしようもできない。」
「もし、それができなかったら・・・」
しーちゃんは事の重大さを今あらためて認識したようにつぶやいた。
「ロクは撃たれる・・・」

未来へ跳んでから知らず知らずに浮かれた気持ちなっていた3人の中に再び大きな緊張が芽生えた。

「何からやればいいの」
ようやく事態をのみこんだユカが不安そうな面持ちで教授の眼を見つめた。
「とにかく、僕らはロクに会う、会わなけりゃどうにもできない、これから帰ってロクのことをみんなで調べよう、全員で一緒に調べるより効率的だ」
「みんな、メモできるものある？」
「何、しーちゃん」
「いい、これからあたしが言うことをメモして！記録を残すの、次に会うのは今夜の7時、場所はがらくた館で」
「それぐらいいくらあたしでも覚えられるよ」
ユカが不満そうに口をとがらせて見せた、教授はしーちゃんが何

を意図しているのかを理解しゅっくりとうなづいた。
「違うのよユカ、よく聞いて、ウルシと連絡がつかなくなっているように、あたしたちもいつどうなるかわからないわ、記憶が失くなったら最後、あたしたちは再会することも、もちろん園田君を助けることもできなくなるの、でもメモを残しておけば万が一記憶を失くしてもこのメモが私たちをつなぐ細い命綱になるかもしれない」
ユカはしーちゃんの言葉をひとつひとつしっかりと聞き取りながら、その重要性を認識し、大きくうなづいてみせた。
「わかった、さすがしーちゃん！」
＞／ｓｐａｎ＜

15　現実

カラカラカラン。乾いた鈴の音に続いて外の雨の音が店の中になだれこんできた。
夜になって降り出した雨は時間を追うごとに激しくなり、傘をさしていても意味がないぐらいに夜の街になだれおちる。

「いらっしゃい」
「こんばんは、すごい雨、急に降り出して、まいった、まいった」
「ユカちゃん、まだお祝いを言ってなかったね、就職おめでとう」
「ありがとマスター」
「ユカ」
「しーちゃん、教授、2人とも早かったね、あたしが1番近いのに」
「もう長いことお待ちですよ」
「あたし、レモンティー。それから秘密基地借りていい？」
「どうぞ、この雨じゃお客さんも期待できないし、ごゆっくり」

店の奥にある窓辺のテーブル席、＞あの頃＜から秘密基地と呼んでいたスペース、窓をたたく雨の向こうに港のあかりがぼやけて見える。三人が席を移ると同時にユカが教授に問いかけた。

「どうだった、何かわかった？」
「いや、僕はとにかくロクの事を調べまくってみた」
「それで？」
「うん、ロクは高校2年で飛び級して、大学の建築家に入学してる、その2年後の19歳の時に世界でも有数の建築デザインコンペで史上最年少グランプリを獲得していた、正にロクの夢に描いていた通

りの未来だ」
「私も見たわ」
「驚くことじゃ・・ないよね」
「うん、大切なことはどうやってあいつに会えるかってことだ」
「あたしもロクちゃんに関する資料はできる限り目を通した、でも連絡先と言えば大学の代表番号ぐらい、電話してみたけど取り次いでもらうなんてとてもとても・・」
「そうだろ、今のロクは世界的にも有名な建築家だ、簡単に会うなんてことはできないと思った方がいい」
「でも、時間がないよ、1週間以内に会って連れ戻さなくちゃ」
「そうなんだ」
「でもどうやって」

ユカはあらためて現実を突きつけられる、未来へ来た昨日は何だか夢のようで新しいスタートに心浮かれてさえいる自分がいた。しかし、時間がない、間に合わなければロクちゃんが死んじゃうかもしれない、何としてでも見つけなくちゃ・・。

「とにかく3人で出来る限りの事はしよう、僕は明日あいつの大学まで行ってみようと思う、日曜日だから会えないとは思うけど」
「ユカ、園田くんの昔の家ってこのすぐそばじゃなかったかしら？」
「うん、行ってみたよ、市営住宅はなかった。老人ホームと小さな公園に変わってた」
「そう・・」
「明日は休みだしあたしも一緒に行く」
「私も行くわ」
「よかった、やっぱりしーちゃんがいないとね」
「わかった、月曜日からはそれぞれ仕事に行かなくちゃいけないから身動きが取りにくくなる、明日のうちにロクに会える可能性のあることはやれるだけやってみよう」

「じゃ、メモとって」
「4月3日・日曜日・朝の9時に水島駅の改札に集合」
「了解」

激しい雨は相変わらず窓をたたき続けていた、窓に映る赤レンガでできた壁もしっとりと湿り気を帯び、ふと触れた指先から冷たい感触が伝わる。

「極秘会談は順調かな」
「あ、マスター」
「雨の中をわざわざ来てくれたお礼に、はいこれはサービス」
「わ、うれしい」
「レモンケーキね」
「ありがとうございます」
「マスターありがと、相変わらずやさしいね」
「そりゃあ、ユカちゃんは大切な常連さんですからね、そのうち取材に来てよ」
「うぬ、おぬし、なかなか商売上手」
「実は、ロクちゃんを探してるの」
「ロクちゃん？」
「うん、ロクちゃん、この先の市営住宅に住んでた、小学校の頃よく連れて来たでしょ」
「さぁ、僕も仕事柄1度来たお客さんは忘れないつもりだけど」

3人は何かを感じ思わず顔を見合わした。

「私たち2人は？」
「志水さんと内山君」
「マスター、ウルシは？」
「ウルシ？」

「やっぱり小学校の頃に何回か連れてきたんだけど」
「これはまた、どちらもずいぶんと昔の話で」
「わからない・・ですか？」
「初めて聞く名前ですね」
「そう・・・」

再び3人は顔を見合わす。そして、互いに何かがわかったという意思を交換し合うように小さくうなづいた。

「いえ、僕らの共通の友人を明日探しに行くんです、会えるかな」
「そうですか、何やら事情があるみたいですね、でも大事なことは願い続けること、もし会いたいと思っているならそれを念じ続けること、と僕は思います」
「願い続ける・・・」
「そう、希望を叶える最大かつ絶対の条件は思いを持ち続けること、それをやめた時点で希望は失望へと姿を変え、やがては絶望という黒い塊となって心をむしばんでいくものです」
「うん、マスター、わかった」
「明日はきっと会えるわ」
「いや、絶対に会おう」

降りしきる雨は窓の外の世界から他の音を奪うかのように相変わらず激しく地面を打ちつけていた。

「じゃ、明日」
「1つ宿題が出たね」
「えっ、何？」
「マスターはロクとウルシを知らなかった、これが何を意味するか」
「あたし、ロクちゃんをよくがらくた館に連れてきたの、ウルシも確か3回くらい」

「もちろん１２年前の話だけど、なぜ２人だけがマスターの記憶から消えたのかってことだ」
「ええ、それがわかれば２人と会えるかもしれないわね」

訪問

１６　訪問

ロクが研究を続ける大学院は水島駅から列車で３０分ほど離れた小さな駅からさらにバスで約１５分、緑あふれる景色の中にまるで一枚の風景画のように静かにたたずんでいた。

にぎやかな大学のキャンパスから少し離れ、ひっそりとした山間の研究所といった風情だ。夕べの雨が上がり、正門へと続く小路のそばには草花が昨夜の雨のしずくをしっとりとまとい、森の奥からは小鳥のさえずりが耳に心地よい。

ユカは思い切りひとつ深呼吸したあとしーちゃんの方を見る。

「素敵なところね」
「ええ、あっ見て」
「記念碑だ」

しーちゃんの指の先には高さ２ｍほどの石碑が朝露に濡れ、朝日を浴びてキラキラと輝いていた。

＞園田禄先生　世界デザインコンペ　グランプリ受賞を記念す＜

「いよいよね、ユカ」
「会えるかな」
「とにかく当たって砕けろだ」
「正門、守衛さんがいる」

３人はお互いに顔を見つめ、大きく１つ深呼吸をする。教授が守

衛室へ声をかけた。

「おはようございます」

「おはようございます、どちら様ですか」

「あの、僕たち園田先生の友人なのですが、今日、先生はおいでしょうか」

「園田先生のお友達ですか・・アポイントは」

「いえ、近くへ来たのでちょっと会いたくて寄ってみたんです」

「ええと、それは幸運かもしれない、今日は日曜日だけど先生は研究でいらしてますから連絡してみましょう、ここに名前を書いてください」

3人の顔がかすかに緩む、教授が代表して受付用紙に名前を書き記した。守衛室から電子音が流れる。

「テレビ電話だ・・・」

「あ、おはようございます、先生」

「ロクちゃん！」

画面には子供のころの面影そのままのロクの姿が映し出された。ユカは思わず声を出してしまう。

「先生のご友人という方が3名お見えです、アポイントがないのですがどうされますか」

「友人？名前は？」

「はい、内山さん、志水さん、篠宮さんだそうです」

「内山？聞いたことがないな」

「えっ、ご友人では」

「いゃ、知らない、最近嫌がらせの手紙が届いたりと何だか物騒だ、とにかく断わってくれないか」

「はい、わかりました」

守衛は先ほどと打って変って、厳しい表情をたたえてユカたちの方へ詰め寄るように歩み寄った。

「君たち、先生は君らを存じ上げないそうだ、一体誰なんだ」

「いや、僕ら小学校時代の友達で、１２年ぶりに訪ねてきたものですから、先生も忘れているんだと思います」

「本当かい？」

若い守衛の男性はいぶかしそうに３人の顔をじっと見つめ、さらに怪訝そうな声で言葉を続ける。

「ここのところ、先生へのやっかみからか時々君たちのように先生をいきなり訪ねてきては何やらわけのわからない言いがかりをつけるやつらがいて迷惑してるんだ、通すわけにはいかないね、帰ってもらえますか」

（なるほど、命を狙われるくらいの有名人なんだからそんなこともあるのかもしれない）

教授は冷静に考えた。そして、せっかくつながりかけた糸をきってはなるものかという想いで・・・。

「お願いです、じゃ、せめてそのテレビ電話で話させてもらえませんか、顔を見てもらえれば怪しい者かどうかわかりますよね」

守衛は少し考えた後小さくうなずき答えた。

「なるほど、いいだろう」

「ありがとうございます」
「あたしに話させて」
「ユカ・・頼んだわよ」

テレビ電話が再びつながりロクの声がスピーカー越しに聞こえた。

「あっ、先生、先ほどのご友人という方が電話でお話がしたいと言っていますが」
「うん?・・わかった、いいだろう」
(ロクちゃん・・お願い、あたしを覚えていて・・・)
「こんにちは、ロクちゃん!・・いえ、園田先生、あたしの事わかりますか?ユカ、篠宮由香です、小学校の時同じクラスで一緒に6年間サマーキャンプに行きましたよね」
「しのみや・・ゆか・・」
「ほら、家も近所でよく一緒に学校から帰ったじゃないですか」
「・・・すみません、失礼ですがあなたとは初対面です、誰かと勘違いされてるんじゃありませんか」
「ロ、ロクちゃん・・・」
「申し訳ありませんがお引き取り願いますか」
「先生、先生の身に危険が迫ってるんです、お願いします、少しの時間でいいんです、会って話をさせてもらえませんか、お願いします」
「僕に危険?・・見知らぬ人と会って話す、そのことの方がよっぽど危険です、今のお話を聞いてあらためてお会いするのはやめようと思いました」
「お願いです、10分、いえ、5分でいいんです」
「お断りします、忙しいので切らせてもらいますよ」

ようやくつながった1本の細い糸が無機質な電子音とともに切れるのをユカはなすすべもなく聞くしかなかった。画面が切れた瞬間

涙が一筋ユカの頬をつたって落ちた。

「ロクちゃん・・」

「ほら、言った通りだ、帰ってもらえますか、これ以上しつこく居座るのなら警察へ連絡させてもらいますよ」

「ユカ、仕方ないわ」

「しーちゃん・・ロクちゃん、そこにいるのに・・」

崩れ落ちる様子のユカを2人は抱きかかえるようにして、2、3歩引き戻す。

「すみません、失礼しました」

守衛に謝罪の言葉を述べた後で、しーちゃんは続けた。

「あの、ご迷惑でしょうがこれだけ先生に渡していただけますか、私たちの小さい頃の写真です、もしかすると思い出してくれるかもしれないので・・・」

「写真・・わかりました、それくらいならいいでしょう、そのかわり今日のところはこのまますぐにお引き取り願いますよ」

「わかりました、ありがとうございます」

「しーちゃん、ごめん、あたし・・・」

「いいのよ、ユカ、よく頑張ったわ」

しーちゃんに慰められながらも、ユカは情けなさとはがゆさとで、頬を伝いこぼれる涙を止めることができなかった。

チャンスのしっぽ

17　チャンスのしっぽ

「せっかくのチャンスだったのに・・・」

うなだれながらつぶやくユカに教授が肩をたたき優しく励ます。

「当たって砕けろって言ったろ、これも予想の範囲内だよ」

「でも、これでロクちゃんに会うのは難しくなっちゃった、ほんとにゴメン」

「気にしない、気にしない、志水さん、さっきの写真は？」

「ええ、ここにもう1枚あるわ、ほら」

「あっこれ6年生の時の進級写真」

ユカの眼にハッと光が戻った。

「そう、5人揃って学校の池の前で撮ったやつ、覚えてるでしょ、＞3カ月前＜の事ですものね」

しーちゃんは写真を見せながらユカの顔を見つめた。

「えっ、でもこれ・・・」

ユカは見覚えのある写真を見てすぐに違和感を覚えた、そこには5人いるはずが2人足りないのだ。

「そう、私たち3人しか映ってない、園田くんも漆山君もいないの」

「この写真からも証明できる、ロクもウルシもこの未来では僕らとはつながっていないんだ、だからいきなり訪ねて行っても断られて

当然なんだよ」

あらためて教授がユカの肩をたたいてみせた。

「でも、どうして・・」

「わからない、でも、逆にこう考えるんだ、なぜ僕らは昔の記憶のままつながっているのか、それがわかればロクやウルシともまたつながれるんじゃないかなって」

しーちゃんが納得したようにうなづいた、そして二人の目に見えないところで小さくこぶしを握った。

「やるしかないわ、ただ時間が・・・」

「うん、でもぼくら約束したじゃないか、やれるだけの努力をするって、僕は父さんからいつも言われてたんだ、チャンスは何度でもやってくるって、それに気づくか気づかないかが最初のポイント、そしてその次が最大のポイント」

「何？」

ユカとしーちゃんは思わず声を揃えて教授の顔を見つめた。

「見つけたチャンスのしっぽをつかんで離さないこと。いい、この1週間で必ずロクに会えるチャンスは訪れる、3人でそのしっぽをつかむんだ」

「うん、教授頼もしい、あたし本当に尊敬しちゃう」

「照れるな・・・」

「今日はどうしましょう」

「2人は帰って、ここにいても進展はないし、篠宮さんはロクの自宅を何とか調べてみてほしいんだ、家が近所だよね、近くでロクを知っている人がいれば写真を撮ってきてほしい、今度ロクに会えた

時に信用してもらえるかもしれない」
「了解」
「あたしは？」
「志水さんは6年の時のクラスの誰かを見つけて、僕らと違ってロクの記憶に残っていればこれも接点になるかもしれない」
「わかったわ、それで、教授は？」
「うん、ちょっと考えがあるから・・」
「じゃあ、メモ」

＞4月3日　夜7時　がらくた館にて集合＜

「明日からはお互い仕事になるけど、メモを取ってどんなに遅くなってもその日の夜には必ず落ち合おう」
「わかった、じゃまた今夜」
「うん」
「ええ」

ユカたち2人は森の中を駅へと引き返す、教授はジャケットを肩にかけるとおもむろに目の前の建物に視線をやった。

「さて・・と」
（ここまで来て手ぶらで帰れるか）

教授は小走りに建物の裏へと向かう。

（大学院の研究室、刑務所ってわけじゃない、そんなにセキュリティーが厳しいことはない）

ロクは木陰に隠れた低い塀を乗り越え庭に忍びこむ。日曜日の人気のない周辺は人目につかず好都合であった。

（さっきのテレビ電話、ロクの背中越しの窓から桜の木が見えてた、あいつは桜の木の見える一階にいる）

辺りを警戒しながら建物の周りを見て回る。

「思った通りだ、正門以外は特に見張られてもいないし監視カメラらしきものもない」

「あった！あの桜の大木・・ということは」

教授の目が建物の１室をとらえる、静かな裏庭に面した人通りも少ない場所だ。教授は窓の下に身を潜め、ゆっくりとひざを伸ばしていく。

（いた！ロクだ！　どうする？）

（落ち着いて考えるんだ）

（入って声をかける・・いや、ダメだ、さっきの今だ、いきなり話しかけたところで大ごとになるだけだ、僕とわからない以上入ってきたのはただの怪しい人物、冷静に話を聞いてもらえるはずもない）

（でも、せっかくここまで来たのに・・）

（いや、あせるな、下手なことをすれば、それは自分からチャンスのしっぽを谷底に向かって投げるようなものだ）

教授は自問自答を繰り返す。父親からいつも教えられていた合理的な考え方、これこそが教授の最も大きな武器だった。

（会うのはまずい、あとできることは・・）

「先生」

ドアをノックする音とともに誰かの声が聞こえた。

「学生が論文の相談来ましたけど」
「ああ、約束してある、面談室に通してあげてくれ、すぐに行くよ」
ロクはそう言うと研究室を出ていく、カギをかけて・・しかし、窓の隙間から入り込む春風は窓際の白いカーテンを優しげに揺らしていた。

（あいつ、この辺は変わってないな）
（チャンスのしっぽ・・・）

教授は静かに窓を開け、自らの身を持ち上げ部屋の中に落とし入れる。懐から取り出したのは小型のカメラ、1秒間に3枚は撮れる速射砲みたいな優れものだ。

（よし、何かわかるはずだ）

教授は部屋中のあらゆるものに向けてシャッターを押し続ける。壁、本棚、床、ソファー、机の上、キャビネットそして・・

（さあ、最後だ）

辺りを見回し人の気配がないことを確認すると静かに机の引き出しを手前に引きよせた。ものの5分足らずの時間が冷静な教授にも1時間近くに感じられた。

（終了　ロクごめん・・これもロクを救うためなんだ）

再び窓を乗り越え教授は春の日差しの中にいた。まだ花冷えとも言える春の風が教授の汗をひんやりと包む、教授はひとつ小さなくしゃみをすると足早に走り去っていく。

全てを見ていたのは庭に咲く満開の桜の大木だけだった。

手がかり

１８　手がかり

「おはようございます」
「おはよう。宿題は大丈夫？」
「あっ、はい、大丈夫です」
「よろしい、じゃあ今日の夕方テストするわね、局の中のルールとアナウンサーの基本の基本、最初に話した通りここでは仕事を覚えながらの促成栽培だから、懇切丁寧な研修はないと思ってね、そのかわりわからないことは何でも聞いていいから、今だけよ、何を聞いても許されるのは」
「わかりました、それで今日は」
「篠宮さんの最初の仕事は、あっ山梨君」
「はい、部長」
「今日の取材、篠宮さんを連れてって」
「了解です」
「じゃ、あとは彼に聞いて、しっかりやるのよ」

あわただしい１週間が始まる。テレビ局に土日はあまり関係ないが、それでも月曜日は不思議と気持ちが新しい。

「じゃあ、篠宮くん・・でいいか、こいつを持って」
「はい、何が入ってるんですか」
「まあ、色々だ、取材に関するグッズ」
「か、かなり重いですね」
「カメラマンも一緒に行くから、機材を持つのも新人の仕事と思って」
「山梨さんは４年目でしたっけ」

「そうだよ」
「そうは見えませんね」
「どういう意味？」
「いや、しっかりしてらっしゃるので」
「これは、どうも、何となくわかると思うけどここでは自分で仕事を覚えていく、だから、覚えるのも早いんだ。勉強と同じだよ、押しつけられた知識はすぐに忘れるけど自分から覚えた知識は簡単には忘れない、この職場は何でもやらせてくれる、責任は重いけどやりがいがある、頑張ろうぜ」
「はい、わからないことは何でも聞きます、1度で覚えるようにするのでよろしくお願いします」
「OK、いい心がけだ」
「今日はどこへ行くんですか」
「山陽スタジアム」
「野球場？」
「ああ、12時から今をときめく地元のスターのインタビューだ」
「地元のスター・・」
「漆山航、名前ぐらいは知ってるだろ」
「えっ！漆山航！」
「その反応は、さてはファンだな」
「い、いえ・・あたしと同じ水島の出身なので」
「その通り、せっかくだ、インタビューの最後に2、3質問のチャンスをあげるから考えておくんだな」

（ウルシに会う・・何てこと・・ううん、これはきっとチャンスのしっぽ・・）

「よし、出発しようか、こちらはカメラマンの有さん、今日はビデオとスチール両方お願いします。」
「ほいさ、機材は新入りさんが持ってくれるのかな」

「あ、はい、篠宮と言います」
「カメラマンの橋本です、ドライバー兼任」
「じゃ、行きましょう」

３人を乗せた車は、海沿いの道を春のまぶしい日差しを浴び軽快に走る。ユカはウルシに会えると思うと胸の鼓動が高鳴るのを抑えきれなかった。

「有さん、車、充電大丈夫ですか」
「おお、１００％だ、こないだは悪かったな、途中で電池切れなんて」
（電気自動車なんだ・・）
「おっ見えてきたぞ」

海辺に巨大なドーム型の建物が見える。車が近付くにつれてそれは大きく羽ばたこうとする白い鳥のように優雅な姿を3人の前に現した。

「おはようございます、テレビ瀬戸内ですが、漆山投手の取材に来ました」
「おはようございます、球団広報の中村です。ちょうど練習が始まったところですからどうぞ」

スタジアムの入り口から緩やかなスロープを上がり切るといきなりパッと視界が開けた。

「き、きれい！」
「素晴らしいでしょ、チームはまだまだ発展途上だけどこのスタジアムは日本一美しいと思ってます」

中村は誇らしげに親指を立てて見せた。
一面の白い壁に鮮やかな緑の芝生、空の青がまるで絵の背景のようだ。

「白い色がくすまないように月に1度は新しく塗り替えてますから」
「ほんとにきれいな球場ですね」
「あそこで投げてるのが漆山です、まだ朝早いけどいつも1番乗りですよ」

背の高く精悍な顔つきのピッチャーがマウンドでキャッチャーを相手にピッチングをしている。既に相当投げ込んでいるのか、少し離れたここから見てもまだ春の冷たい空気の中、体から湯気が立ち上っているのがわかる。

（ウルシ・・だ）
ユカはあらためて不思議な緊張感に包まれた、ウルシが目の前にいる、12年後のウルシが目の前に・・・大人になったウルシ・・・

「漆山！お疲れ、取材だぞ」
「はーい、今行きまーす」
（ウルシが走ってくる、24歳のウルシが近付いてくる）
「こんにちは、テレビ瀬戸内の山梨です」
「こんにちは、漆山です」
「それから、おい」
「あ、篠宮・・由香です」

ユカはじっとウルシを見つめる、「ユカ！」という声と笑顔が帰ってくるのを自分も笑顔で受け止める心の準備はできていた。

「はじめまして、漆山です」

「えっ」
「新人なんです、漆山投手と同い年です、今日は一緒にお話を聞かせてもらいます」
「そうですか、かまいませんよ」

（わからないんだ・・あたしのこと　大人になったから？ううん違う、あたしは名前も言った、でもあの反応は・・あたしの事が記憶から消えてる、そうとしか思えない）

ユカは現実にとまどいながらも冷静に、冷静にと自分の気持ちを鎮めようと努めた、ロクと同じようにウルシの記憶にはユカの姿はなかった。

１９　記憶

（目の前にウルシがいる。２４歳のウルシ、大人になったけど笑い顔は全然変わってないよ。でも、どうしてあたしがわからないの？４日前まで話してたじゃない、一緒に泣いたり笑ったりしてたじゃない、ロクちゃんを助けるんでしょ？ウルシだけがロクちゃんに会えるかもしれないの、お願い、あたしに気づいて）

「どうもありがとうございました、もうすぐ開幕です、頑張ってください」

「篠宮君、質問あれば、せっかくだから」

ウルシがユカの方に顔を向ける。目が合い、ユカはどぎまぎとして、思わず下を向いてしまう。

「新人なんです、質問させてあげて下さい」

「ええ、どうぞ」

「はい、ええと・・あっ、もしよければロッカールームを見せてもらえませんか？」

「ロッカーを？」

「ええ、あたしも野球が好きで、前に雑誌で見たスター選手のロッカールームがとてもかっこよく見えたので」

ユカのいきなりの願いに初めは少し戸惑ったウルシだったが、わずかの間をおいて笑顔で答えた。

「いいですよ、ちょっと散らかってるけど」

「ありがとうございます」

ユカは自分の言葉に驚いていた、緊張のあまり質問など思い浮かばず、何も考えずにとっさに出た言葉であった。

ウルシの背中を見ながら廊下を歩く、その背中は《4日前》と比べると格段と大きく、そして広かった。

「さあ、どうぞ、ここが僕らのロッカールームです、普段は女性が入ることはないんだけど、まだ誰も来てないからどうぞゆっくりご覧ください」

ウルシは手を広げて笑顔でユカを招き入れるポーズをとった。畳2畳くらいの広さはあるだろうか、個人用のベンチに白いロッカー、小物を置く棚もある。棚には高校のチームメートらしき写真スタンドやファンからのプレゼントか小さなクマのぬいぐるみがマスコットのように置かれている。

「思ったより広いですね」

「うん、このスタジアムは見ての通りとてもきれいで設備も大満足です」

ようやく落ち着いてきたユカは冷静さを取り戻しつつあった。

（よし、運よくロッカールームにまで入れたんだから、何かヒントの一つももらって帰らなくちゃ、チャンスのしっぽ・・・チャンスのしっぽ・・・）

「ここをバックに一緒に写真を撮らせてもらってもいいですか」

「もちろん、篠宮さんは新人ということだし、オレと同級生ですよね、篠宮さんが人気女子アナになったらお宝になるかもしれないな」

「ふふっ、ウルシらしい・・」ユカは小声でくすっと笑った。

「えっ、ウルシはオレの小さい頃からの呼び名なんだ、なんだか懐かしいや」
「橋本さんお願いできますか」
「おお、任せとけ、最高のツーショットにしてやるよ」
「お願いします」
「はい、チーズ！」

シャッター音とともに空中には撮影された映像が立体的に浮かび上がった。
（おっ、すごっ、最新兵器）
そこにはちょっと驚いて間の抜けた顔をしたユカと優しさいっぱいのウルシが立っていた。

「今日は本当にありがとうございました」

橋本が深くお辞儀をしながらウルシに握手を求めた。ウルシはその手を固く握り返すそばでこんなことを口にした。

「こちらこそ、じゃ、開幕は今週の土曜だからぜひ見に来て下さい」
「えっ、ばらしちゃっていいんですか」
「絶対に開幕で投げますよ、オレの心意気」

スタジアムを後にしてユカは考えた、ウルシはロクちゃんと対談をしたことがある。ウルシなら昨日のあたしたちと違ってロクちゃんに会えるはず。でも、それにはウルシの記憶が戻らないと・・・。

「なかなか新鮮だったよ」
「何がですか？」
「ありふれた質問をするのかと思ったら、ロッカールームを見せてほしいなんて、篠宮君度胸あるじゃない」

「いえ、何かの手がかりになるかと思って」
「手がかり？」
「あっ、いえいえ、選手と親しくなる方法ってことです」
「あっそういうこと、今日はどうだった」
「はい、勉強になりました、これから帰ったらテストです。入社初心を書くレポートもあるので今日の事を書きます」
「そりゃいい、頑張って」

グラウンドに出たユカは取材の後間もないウルシがもうトラックの横でキャッチボールの用意をしているのを見つけた、まだ冷たい午前のきりっとした空気とやわらかな春の光がユカの気持ちをも引き締めた。
（またすぐに来るからね、ウルシ）

局に帰り、基本事項のテスト、初心をつづるレポート、局内のあらゆる場所の確認。主要な先輩方への挨拶。とにかく密度の濃い午後を過ごしたユカが自宅に着いたのは、９時過ぎだった。

「ただいま、ハハ。あー疲れた」
「お帰り、ユカ、お風呂沸いてるわよ、すぐに入ったら」
「ありがと、きっと体とろける気がする」

疲れ切った体を脱衣所へと運ぶ。すぐにでも湯船に飛び込みお湯の中に身を沈めたい。

「ほんっと、疲れた、あっ、ネックレス、取る」

ネックレスを外し、ポーチの中へ入れる。温かいお湯に体が本当にとろけそうだ。

「あー気持ちよかった、ハハ、夕飯は」
「おじいちゃんとお母さんはもう食べたからそこでグラタン食べて、お父さんは遅いし、ハルは今日友達のところに泊るって」
「わかったー」
「あーおなか空いた、あっ、そうだ、明日の予定を見ておかなくちゃ」
「うん？　＞４月４日　２２時　がらくた館＜　これ・・・何だろ」
「今、グラタンあっためるから」
「ねえ、ハハ、今日の予定に２２時にがらくた館って書いてあるんだけど、何かな」
「お母さんがあなたの予定を知るわけないでしょ、それに２２時ってもう過ぎてるわよ」
「気になるから行ってくる、グラタン帰ってきてから自分でやる」

ユカはジャージの上に黄色いカーディガンを羽織り、財布の入ったポーチだけを持って庭を駆け抜けた。格子戸を開き立ち止まる。
右手には山の中腹にあるロープウェイ乗り場、夜景を見る観光客のために最終は２２時の下りとなっている。「がらくた館」もこの最後のお客さんを迎え入れるかのように閉店は２３時になっている、この町にしてはかなり遅い時間だ。

カラカラカラン
「ゆや、こんばんはユカちゃん・・奥でお友達がお待ちだよ」
「お友達？」
「ユカ、待ったわよ」
「あなた・・誰ですか？」
「誰って、何、ふざけてるの」
「いえ、お会いしたことないですよね」
「えっ、どういうこと？」

しーちゃんとユカの会話を聞いていた教授が何かを察したようにしーちゃんの顔を見つめた、そしておもむろにユカに向かって話しかけた。

「どうやらふざけているわけじゃないようだ、篠宮由香さん、ちょっと座ってもらえますか」

「いいですけど・・」

「ちょっとだけ時間をくれませんか、怪しいものじゃありませんから」

「・・・」

「志水さん、僕と篠宮さんをよく見て！昨日と何か違うことはない？」

「えっ、どういうこと？」

「篠宮さんの記憶から僕たちが消えてる、そう判断した、ロクやウルシと同じなんだ。でも昨日は、記憶があったし今の僕も記憶がある、だから・・僕と篠宮さんに何か違いがあるはずなんだ」

「わ、わかったわ、ユカごめんね、じっくり顔を見せて」

しーちゃんは二人を見比べ、上から下へとなめるように見ていく、ユカはあんまりじっくと見られて照れたような素振をした。

「ちょっと、そんなに近くで・・恥ずかしいです」

「あっ！」

20　発見

「何かわかったのかい？」

教授がしーちゃんを見つめて言った。

「ネックレス！」

「教授は・・してる、私も」

「ユカは・・外してるわ」

「それだっ！」

「何となく気になって僕もずっと外さずにいたんだ、寝る時も、風呂に入る時も」

「私もよ、外すのが何だか怖くて」

「ちょっと、一体何の話ですか」

二人の話を聞いていたユカがいぶかしげに尋ねた。

「ごめんなさい、そのポーチちょっと貸して」

しーちゃんはユカのポーチをなかば強引にとりあげた。

「あっ何するの」

「あった！」

「お願い、何も言わずにこれをつけてみて」

しーちゃんがポーチから取り出したネックレスをユカの目の前に突き付けた。

「えっ？どういうこと？勝手に人のもの取って」
「それは謝るわ、だからお願い、ネックレスを・・つけてみて」

ユカは渋々ながらもネックレスを手に取る、手にした瞬間指先がピクッと震えたような気がした。ゆっくりと首に持っていく、前からチェーンを回し、くび筋で留めた・・・瞬間！

ユカの頭の中はぐるぐると回転するかのように記憶が渦巻き駆け巡る。あまりの激しさにショックで頭がゆれたような錯覚に陥った。

「あたし・・」
「私の事わかる？ユカ」
「しーちゃん」
「ユカ！」
「記憶が戻った」
「教授」
「からくりがわかった、僕らを未来に連れてきたこのネックレス、こいつが鍵だったんだ」
「どういうこと？」
「推理するに、このネックレスを触った者はネックレスをしている時に限ってお互いの過去の記憶をキープできる、そして外した瞬間に現在も含めてそれを失うんだ、関わった周りの人の記憶からも消えるのかもしれない」
「篠宮さん、ネックレスを外したのはいつ？」
「確か、今日家に帰ってお風呂に入る時」
「そこで記憶が消えた」
「どうしてここに？」
「手帳を見たらメモがあったの」
「志水さん、お手柄だ、メモを取ってなければ篠宮さんはここには来てないんだよ」

「なるほどね」
「ネックレスを外したピンチをメモが救ってくれたんだ、それどころかネックレスのからくりまで教えてくれた」
「怪我の功名と言ったところかしらね」
「あたし、役にたった？」

ユカが何だか訳が分からぬ様子で、それでも少し得意げな顔で二人に問いかけた。
しーちゃんと教授は顔を見合わせてくすっと笑う。そして2人同時に

「もちろん！」
「これではっきりした、ロクもウルシもネックレスを外しているはずだ」
「だからマスターは覚えていないのね」
「どうすればいいの？」

ユカがようやく要領を得て会話に入っていく。

「2人にネックレスをつけさせなければ話も通じない、ましてロクを連れ戻すことなんて」
「園田くんに会うのはもう難しいんじゃない？昨日のことがあるし」
「ごめん、あたしが上手くやってればね・・」
「ねぇ、漆山君なら園田くんとコンタクトがとれるんじゃない？ほら2人は対談してた、きっと連絡先の交換もしてるわ、会おうといえば警戒されることもないと思うの、どうこの考え？」
「うん、でもウルシに会うのがまた一苦労だ。あいつもスターだからね」

困った顔をした教授を見ながらユカがおずおずと口にした言葉は・

・・

「あの・・実は今日ウルシに会ったの」
「えっ、何だって！」
「初めての取材に同行したら、取材の相手が」
「漆山君だった」
「うん、あっこれ、その時の写真、ロッカールームで撮ってもらったの」

ポーチから取り出した写真にはユカとウルシのツーショット、有さんが局に帰ってきてからすぐにプリントしてくれたものだった。

「すごいぞ、チャンスのしっぽがスルスルとこっちに伸びて来てる、なんて偶然なんだ、このしっぽ絶対に離さないぞ」
「連絡先はわかる？」
「ううん、何しろ　＞初対面＜　だからそこまでは、でも球場に行けば会えるとは思う」
「よし、入口はそこだ」
「会えたとして、それから」
「ウルシにネックレスをつけさせる」
「どうやって？第一どこにあるの」
「・・・」

ウルシにあったという事実に顔を輝かせた教授はしーちゃんの問いかけにまた難しい顔に戻った。

「漆山君、球場になんか持ってこないんじゃないのかしら、そうしたら家にあるのを持ってきてもらって、それから・・・」
「うーん、ハードル高そう」
「でも、やらなくちゃ、そのあとロクと連絡を取る、ロクに会う、

ロクにネックレスをつけさせる・・・先は長い、それをロクが日本を出発する日曜日までにやらなくちゃいけないんだ」
「時間がないわ」
「・・・」

タイムリミットは限られている、日曜日までにこの高いハードルを越えなければロクの命がどうなるか分からないのだ、三人はあらためて事の重大さに緊張した。チャンスのしっぽが目の前にある、しかし、つかんだあとにどうすればいいのだ、無理に引き寄せれば切れてしまうかもしれない、かといって何もしなければしっぽは手の中からするりと逃げてしまうかもしれない。
しーちゃんがじーっと写真を見ながらつぶやく。

「漆山君、なかなかかっこいいじゃない」
「うん、でも笑うと昔のウルシそのままだったよ」
「この写真いい感じじゃない、とても　＞初対面＜　とは思えないわね」
「ウルシはあたしのことわからないけど、あたしは会えてうれしかった、緊張したけどね」
「ウルシに会ってネックレスをつけさせるまでの作戦を練ろう、みんな仕事もある、行き当たりばったりじゃ5日間なんてあっという間だ」
「まずはあたしがウルシに会うのが先ね」
「できる？」
「わからない、でも仕事は自分で見つけて自分で覚えろって言われてるの、今日の取材をもっと深くやりたいってお願いしてみる」
「志水さんの予定は？」
「しーちゃん？どうしたの」

しーちゃんは黙ったまま視線を1点に集めている、視線の先は2

人が写った写真。くいいるように見つめている。

「もう1つチャンスのしっぽを見つけた」

「えっ」

「これ見て」

「なになに？さっきの写真じゃない、あたしきれいに映ってる？」

「そうじゃないの、ここを見て」

ユカと教授は身を乗り出して写真を見た。そしてしばらくの沈黙のあと2人同時に大きな声をあげた。

「あった！」

写真

21　写真

「間違いない！あのネックレスだ」

二人が写真の中に見つけたもの・・それは・・

ロッカーの棚の上に置かれたかわいらしいクマのぬいぐるみ。おそらくファンからの贈り物であろう。大人の顔の大きさぐらいの愛らしいクマはネックレスを提げ、その両手はガーネットのペンダントを大切に持つように胸の下で受け止めていた。

「意外と簡単に見つかったわね」
「ああ、写真がなければ探すだけで1週間が過ぎてたかもしれない」
「あたしもチャンスのしっぽを離さなかったんだ、やったね」
「ユカ、お手柄よ」
「2人とも素晴らしい！」

教授が手を打って満面の笑みを浮かべた後すかさずユカに向かって言い放った。

「篠宮さん、またまた当たって砕けろだ、ウルシに何とか会って、出来ることならどこかに連れ出してほしい、今の僕らの中でウルシに会えるのは篠宮さんだけなんだ」
「わかった、今度はロクちゃんの時みたいにヘマしないから」
「でも、入社5日目でしょ、そんなにわがまま言えるの、ちょっと心配」
「やらなかったらロクちゃんが死んじゃうかもしれないんだから、

あたしがクビになることぐらいなんでもない」
「ユカ・・・」
「もし、みんなと離れてもあたしが連れて帰るから」
「よし、念のためメモだ、４月５日火曜日、２０時こことスタジアムの中間あたり、みなと公園の噴水広場ということにしよう」

興奮した時はあっという間に過ぎ去り、店は閉店の時間を迎えた。マスターは何も言わずいつものようにこやかな笑顔で３人を送り出した。

「おやすみ、また明日も来てくれるのかな？」
「あしたはちょっとわからないけど・・また来ます！」

未来の世界でとぎれそうになっていた５人の糸が再びつながろうとしていた。時間はない、限られた時間だ、しかし、５人は同じこの世界に住み、それぞれがそれぞれの思いを胸に抱き存在していた。そして記憶はなくしても心のどこかで仲間を呼んでいたのかもしれない、それが偶然の出会いを呼び起こしたのだろうか、とにかく一つはっきりしたことがある。３人はウルシとロクを呼び戻すチャンスのしっぽをつかんだ！

同じころウルシは開幕を５日後に控え、スタジアム近くの合宿所にいた。

「監督、入ります」
「おう、入れ、そこに座れ」
「はい」
「呼ばれたのは何かわかってるな」
「そのつもりで来ました」

「9日の開幕戦はお前に投げてもらう」
「ありがとうございます」
「初めての開幕投手だ、チームでたった1人の名誉だ、思いっきり緊張して行け」
「はい」
「マスコミの取材も来ると思うが本番までは他言無用だ、取材もなるべく少なくするように広報に伝えておく、ほかのピッチャーも同じだ、一応カムフラージュしないとな、開幕はナイターだから調整も必要だ」
「わかりました、この5日間でベストに持っていきます」
「よし、行け」
「はい！」

夜も更けた大学院の研究室にはまだ明りが灯っている。ロクは自宅に帰らずに研究室に泊りこむ日々が続いていた。

「先生、大丈夫ですか、お疲れじゃ」
「ああ、大丈夫、設計の最終点検とコンペのプレゼンの準備だよ、何しろ日がないからね」
「出発は1日早くなって10日の夜になりました」
「了解、ありがとう、荷造りを手伝ってくれるかい」
「もちろんです」
「先生、今回の手ごたえはどうです」
「ああ、グランプリを取ればアジアナンバー1のタワーだ。高さは1000メートルだぞ、こんなに名誉なことはないさ」
「ライバルはどこになりそうですか」
「どこも強敵だよ」
「最終参加は10か国から10社、大学からの参加は僕らだけですね」
「うん、ぼくはビジネスはどうでもいいんだ、お金もそりゃ大事だ

けど、自分の設計したタワーが世界中の人に夢を与える、それだけで十分じゃないか」
「ええ、僕もそう思います、先生と一緒に設計に携われて幸せです」
「ありがとう」
「まだかかりそうですか」
「いや、今夜で終わるよ、出発までの5日間は興奮にじっくりと浸ってみるつもりだ」

つかれた体でベッドに横たわりながら、しーちゃんもまたこの何日かのあわただしい日々を振り返っていた。

「明日のスケジュールを見なくちゃ」
「公演の稽古始めだわ」
(園田くんを助ける)
(ステージに立つ)

落ち着いてみて初めてしーちゃんは未来へ来てからの自分のこの先を思いやった。

「私はこれからどうすればいいのかな」
「ううん、まずは園田くんの命を救うこと、それから先はそこで考えればいいわ」

独り言のようにつぶやくとこれからまた始まるであろうジェットコースターのような日々を思い眠りについた。

教授はなかなか眠れずに本を読んでいた。

＞科学を学ぶ者へ・・初めに肝に銘ずることだ。科学そのものが尊いのではない。それはあくまでも道具でしかない。科学は人類の幸

福のためのひとつの道具である、使う人間の心ひとつでどんな科学技術も悪魔にもなれば天使にもなる。科学の道を追究する者は、常に自分の事ではなく人類すべての事に目を向けなければならない。そして信じることだ、たとえ千回の実験で真理が見つからなくとも、千一回目にそれは見つかるかもしれない、そのことを信じ続けることができる者だけが科学を追究する資格を持つのである＜

（信じることか・・）
（信じられないことばかり続いたけどな）
（うん、信じよう、僕らはきっとロクを助けることができる）

記憶を取り戻したユカは自宅の居間でおじいちゃんの愛用のロッキングチェアーにもたれながら。

「おじいちゃん」
「おお、ユカかい、どうした」
「あたしのこと見てどう思う」
「どうって、大人になったのう」
「大人・・ほんと？」
「ずっと子供のままでもいいんじゃけどな」
「ね、あたしのいいところって何かな」
「ユカは小さい時から真っ直ぐな子じゃった、ドジでかわいいイノシシじゃ」
「えっイノシシ？・・うん悪くないな」
「何か心配ごとでもあるんか」
「ううん、大丈夫、ありがと」
「何かあればじいちゃんが応援するからな、こう見えても書道2段じゃ」
「書道じゃちょっと頼りないよ、あたし明日イノシシでいくよ、頑張ってみる」

22　突進

「どうかお願いします！」
「うーん、今日は予定では久保木さんについて丸一日放送の現場を覚えてもらうつもりなんだけどなぁ」
ユカは翌日ウルシの取材を山梨に願い出た。
「昨日、漆山選手にお会いして、どうしてももう1度取材してみたくなったんです、お願いします、行かせてください」
「意気込みはいいけど、その日の朝に言われてもなぁ・・社会人なんだから、勝手な行動は許されないわけだ」
山梨は困った様子で諭す様にユカに伝えた。
「申し訳ありません、でも、開幕の前にもう1度お話して1年間を追ってみたい、昨日の取材の後その思いが抑えきれなくなって」
「でも、アポも取れてないし、部長も何て言うか・・」

小さな沈黙を重みのある声が打ち破った。

「いいじゃない、行かせてあげなさい」
「あっ部長」
「いいんですか」
「入社5日目、この子が抜けても今なら何の問題もない、それに自分から仕事を見つけろと言ったのは私だしね、それぐらいのやる気がないといい仕事はできないわ、山梨君にこんな度胸あった？」
「はあ・・・確かに」
「私が許可するから行きなさい、ただし、アポもないし、他のマスコミも彼には注目しているはず、行って空振りは許さないわよ、あ

なたなりに何かを持って帰ってくること」
峰岸の言葉に思わずユカの声に力が入った。
「はいっ、ありがとうございます」
ユカはこれ以上ないほど深く頭を下げると局の廊下を駆け抜け、まだ冷たい午前の空気の中に飛び出していった。
スタジアムでは昨日と同じように午前中のまだ人気の少ないグラウンドでウルシがユニフォームに身を包み、ウォーミングアップを始めるところだった。通路からグラウンドに入ろうとしたその時。
「あ、こら！勝手に入っちゃだめだ、一体どこのマスコミだ」
球団の職員か、それとも警備員か、その声はひどく警戒を含んでいる。背が高い中年の男は厳しい眼でユカに視線を向ける。
「あ、おはようございます、テレビ瀬戸内の篠宮と言います、漆山投手に取材をしたいんですけど」
「約束は？」
「いえ、昨日インタビューをさせていただいてその続きを・・」
「だめだめ、ちゃんと広報を通してアポイントを取ってもらわないと、漆山はチームにとっても大事な選手だ、アポなしの取材は一切お断りだね」
「昨日のお礼も伝えたくて・・少しだけでも時間をいただけませんか」
「だめだね、午前の練習の後、テレビと新聞の２つの取材が入っている、開幕前だしあらかじめ約束のあるもの以外の接触は許されない、さっ、帰った帰った」
（イノシシ　イノシシ　・・）ユカは心の中で呟きながら気持ちを

奮い立たせた。

「そこを何とかお願いできませんか」

「ダメと言ったらダメ、君、あんまりしつこいと会社に連絡して抗議するよ」

（落ち着けイノシシ・・ロクちゃんの時と同じじゃ学習能力ゼロだぞ）

「わかりました、すみません、それじゃ、客席から見学するだけなら・・いいですか」

「個人的な接触をしないと約束できるならな」

「約束します」

グラウンドには三々五々選手が集まり、次第ににぎやかな様相を呈し始めている。ウルシはウォームアップを終えるとマウンドに上がり、後から来た選手を相手にシートバッティングのピッチャーを務めていた。

ユカはウルシとどうやって会おうかと考えながらもその姿をある想いでながめていた。

（ウルシ、かっこいいよ、あたしあの時未来のウルシに笑って会えないって言ったけど、今のウルシはとっても素敵だよ、でもロクちゃんを助けるためには昔のウルシに戻ってもらわなくちゃいけないの、これからあたしがすること許してね）

時計の針は１１時半を指している。

（そろそろ、午前の練習が終わるわ、きっとお昼を食べて取材・・どうしたらいい？）

「よしっ、やるしかない」

ユカは意を決した様子で観客席を飛び出した。向かった先はロッカールーム、あたりを見渡すとまだ練習が終わる前だからか、選手の姿は見えない。ユカは正面玄関を避け、選手が出入りする裏口の扉へと向かった、そこは、昨日の取材を終えウルシと一緒にロッカーを出てきた場所だった。

こっそりと忍びこむと、だれにも見つからないようにロッカールームへと向かう。途中で廊下の奥から職員らしき人が歩いて来るのに気づく。ユカはとっさにトイレの中に身を潜めた。

（きゃっ、男子トイレに入るの生まれて初めて）

再び廊下を進むとそこには見覚えのある風景、青い扉を恐る恐るあけるとそこは間違いなく昨日見たロッカールームだった。

（今なら誰もいない、やらなくちゃいけないことは・・・）

ユカはウルシのロッカーをあらためて見渡した。そして、視線の先に見つめたものは。

「あった、熊のぬいぐるみ」

ロッカーの棚の上には写真で見たぬいぐるみが首からネックレスを提げ、両手で大事そうにガーネットのペンダントを抱えていた。

ユカはそっと近づくと、ぬいぐるみが手にしているネックレスを慎重に首から外し、片手の中で握りしめた。

ネックレスを握った手でぬいぐるみを胸に抱きしめた後、元の場所に戻しユカはぬいぐるみに向かって小さくつぶやいた。

「ごめんね」

（これを何とかしてウルシにつけさせればいいんだ、つかんだよ、チャンスのしっぽ。絶対に離すもんですか）

ユカは少し顔を上気させながらもう一度ネックレスを力強く握りしめる。棚の上のぬいぐるみの目がユカを見つめるように顔を向けていた。

奇妙な再会

２３　奇妙な再会

（どうしよう・・ここにいてもウルシに驚かれるだけだし、２人きりで話もできない、追い出されるのがオチだし・・）

ロッカールームに忍び込み、何とかネックレスを手にするまではできた、しかし、そのあとどうすればいいのかがユカにはわからない。考えている間にも練習が終わり選手たちが一斉にロッカーに帰ってくるのだ。そうなったら万事休す、チャンスのしっぽはするりと手から逃げていくかもしれない、ユカはあせった。

（どうする？落ち着いて、あたし！・・そうだ）

ユカがバッグの中から取り出したのはエメラルドレモン、お守り代わりに常に一つ忍ばせていたものだった。ユカはじっと見つめた後思い切りレモンをかじる、果汁のしぶきが微かに顔のあたりに吹き出し、レモンの香りが鼻先でくすぐったく香る。

「きゃっ、すっぱーい！」

顔を思いっきりしかめた後、ユカは何か吹っ切れたようにもう一度かじりかけのエメラルドレモンを見つめた。

「持ってると幸運が訪れる」
（リムーのおじさん！）
「魔法の薬だよ」
（マスター！）

２人の声が聞こえたような気がした。

「よし、いちかばちかだわ」

ユカはロッカールームを抜けだすとついさっき逃げ込んだ男子トイレに再び入る。そして、今度は個室へ身を忍ばせた。胸の鼓動は高鳴り心臓が今にも飛び出しそうだった。

（男子トイレに隠れてるあたしって・・）

５分も経ったころ、静かだった廊下がにわかにさわがしくなった。トイレの前を通り過ぎるカチャカチャというスパイクの音、それに混じって男同士の笑い声や話し声、バットで廊下をつつく音だろうか時折コン、コンという乾いた音も聞こえてくる。

（練習が終わったんだ）

ユカはじっと息を潜めて待つ。その時、トイレのドアが開く音がした。だれかが入ってきたのがわかった、声は聞こえない、１人だ。ユカはそっと、個室のドアを開けるとわずかな隙間から用を足している男の背中を見た。

（背番号・・２２　ウルシじゃない・・）

ユカはそっと扉を閉めるとふたたび息を潜めて待つ。

（神様お願い、ウルシに会わせて！それも２人きりで！）

次の選手もその次の選手もユカの目指す背番号をつけてはいなか

った。ウルシでないことを確認しては扉を閉めるたびにユカの心臓は忍びこんだときの何倍もの激しさで鼓動した。

４人目はなかなかやってこなかった、ユカは祈りながら待つほかない。ロッカーで選手が落ち着いたのかしばらくの時間の後、トイレのドアが４たび開く音がした。ユカは前の３人の時と同じように、慎重に個室の扉をあれ目の前のユニフォームの背番号を見た。

（背番号１４　ウ、ウルシだ！）
（チャンスのしっぽ！つかめ！）

ユカはウルシが用を足し終えて振り向こうとしたた瞬間、意を決して扉を開いた。

「うわぁ！」
「漆山くん！」
「き、君は、確か昨日の・・・」
「ウルシ！」

ユカは半分目をつぶりながらウルシの厚い胸に向かってまるで体をぶつけるように飛び込んだ。

「な、何するんだい」
「戻って！お願い！」

ユカは抱きつくようにウルシの首に手をかけるとネックレスを巻きつけ金具を留めた。ほんの2、３秒の出来事がユカには何分もの長さに感じられた。一瞬ウルシの目がかっと開いた気がした。眼を開いたユカの１０センチもないくらい目の前にウルシの顔があった。
２人の目と目が合う、大きく見開いた瞳の中にお互いの顔が映し

出された。

「ユカ？」

「ウルシ、も・もどった・・？」

「あ、ああ・・」

「きゃっ」

あまりの顔の近さにユカは顔を赤らめて思わず後ろへ飛び退いた。

「ご、ごめん」

「何でここに？」

その時トイレの外の廊下をカツッカツッというスパイクの音が近付いてくる。ユカはウルシの手をつかむと個室の中に押し込んだ。

ドアの開く音、2人は息をひそめ緊張した顔でお互いに顔を見合わせる。わずか1分ほどの時間が流れるのがとても長く感じる。

手洗いの水の音が途切れた。ドアが開き、そして閉じると再びトイレの中に静寂がよみがえった。

「すごい再会だな」

「映画みたいでしょ」

「映画か・・ハハッ」

「エヘッ」

2人は互いの顔を見つめながら思わず声を出して笑った。狭い個室の中に笑い声が響く。

「話していい？」

「いいけど、こんなとこ誰かに見られたら大変だぞ、お前、度胸あるな」

「うん、あたし、イノシシだから」

こうして二人の奇妙な再会は果たされた。ユカは口の中に残るエメラルドレモンの酸っぱさに感謝した。一度は逃げかけた「チャンスのしっぽ」は今一度ユカの手にしっかりと握られたのだ。

乾いた冷たい空気が男子トイレの中に張りつめる、ユカはわずか30センチ先にあるウルシの目を見つめて物語を聞かせるかのようにゆっくりと話し始めた。

２４　作戦

ユカとウルシは男子トイレの狭い個室の中のわずかなスペースに座り込み顔を合わせた。二人の距離はわずかに３０センチばかりだろうか、ユカは妙な照れくささを感じながらもとにかくウルシに伝えねばならぬことがあった。

「前置きはナシね、ロクちゃんが命を狙われる日がわかったの、来週の月曜日、４月１１日。前の日に飛行機で日本を出発するから、それまでにロクちゃんに会って、連れ戻さなくちゃいけないの」

「えっ、今週中？」

「そう、あたしたち、ロクちゃんのところに行って会おうとしたの、でも、あたしたちの記憶がなくなってて会えなかった、このあとも会うのは難しい」

ウルシは取り戻した記憶をさらに手繰り寄せるように頭の中を整理しようと努めた、一度によみがえってくる様々な記憶がウルシの頭の中を渦巻いていた。

「記憶・・」

「ネックレスよ、ウルシも今あたしがネックレスをつけたからあたしがわかったのよ」

「このネックレスが・・」

ウルシはクビに提げたネックレスを手に取ってじっと見つめる。

「そうなの、あたしも1度外した、もちろんその間のみんなの記憶

はない。運よくしーちゃんと教授に会えて戻ったの、そして初めて分かったの、このネックレスをつけていることであたしたちの未来での記憶がキープできるってことに」
「そうか、それで？」
「ウルシ、前にロクちゃんと対談してるわ、お互いの事をわからずにね、２人とも地元のホープだから」
「おお、思い出した、確か正月の・・雑誌の取材だよ」
「だから、ウルシが会おうと言ってくれれば、ロクちゃんに会える、ううん、ウルシじゃなけりゃだめなの」
「しーっ・・誰か来る」

沈黙を打ち破るかのように、ドアが開き何人かの男たちの話し声が聞こえてくる。

「お疲れ」
「おお、開幕投手、聞いたか？」
「漆山だろ」
「ああ、あいつならやってくれるだろ」
「今年は優勝のチャンスだからな」
「１度くらい味わってみたいもんだぜ」

手洗いの音、ドアが閉まり、静寂が再び冷たい空気を際立たせる。ユカはウルシの顔がピクっと動くのを見た。

「ウルシ、投げるんだ」
「ああ、土曜日の夜が開幕だ」
「ロクちゃん・・」
「わかった、任せろ、でどうすればいい？」
「今夜しーちゃんと教授に会う、来られる？」
「夜なら大丈夫だ」

「ここに場所と時間が書いてあるから必ず来て、それから、絶対にネックレス外しちゃだめだよ」
「了解」

ウルシはちょっと笑ったあとユカの頭を軽く2度たたいてみせた。

「じゃ、ここから脱出だ、おれが先に出て合図するからだれにも見つからずにすぐにここから外に出ろよ、新人の女子アナが男子トイレから出てきたなんて見つかったらほんと大変だぞ」
「うん、了解」
「よし、行くぞ」
「あっウルシ」
「何だよ」
「ありがと、思い出してくれて嬉しかった」
「何言ってんだよ」

星空、あたり一面の星空だった。みなと公園は水島港を見渡せる高台にある。花時計と噴水がある以外は何もない、海と町と島を静かにゆっくりと眺める、それだけのために造られた公園だ。夜になればわずかな街灯以外に光はない。

「ようやく4人そろいましたね」
「ウルシが来てくれて心強いわ、ユカ、頑張ったわね」
「おお、トイレでの再会だぜ、みんなに見せてやりたかったよ」
「何言ってんの、必死だったんだからね」
「で、ロクと連絡は取れそうかい」
「もう、連絡したよ」
「えっ早！打ち合わせもしてないのに」
「だって、日もないんだろ、善は急げだ」
「漆山君らしいわね、それでどうなったの」

「ああ、明日の夜だ、もちろんオレも昼間は練習でどうにもならないからな」
「えっ、約束までしたのか」
「おお、出発前の準備があるから研究室に来てくれるならってな」
「研究室・・ウルシ、それは素晴らしい」
「何で？」
「これだ！」

３人は花時計の前で街頭に照らし出された教授の手のひらを覗き込んだ。教授はカバンからおもむろにあるものを取り出してみんなに見せた。それは何枚もの写真の入った小さなアルバムである。

「ロクの研究室の写真だよ」
「ええっ、どうやって撮ったの？」
「昨日、みんなが帰った後さ」
「し、忍びこんだってこと？」
ユカか目を丸くしてすっとんきょうな声を上げた。

「うそ、教授泥棒までやるの」
「泥棒とは穏やかじゃないね、せっかく行ったのに手ぶらで帰れるもんか、首相官邸ってわけじゃないし警備も緩やかだったよ」
「すごいわね、教授」
「それで素晴らしいって、何が素晴らしいの」
「これを見てくれ」

教授は３０枚以上はある写真の中からある１枚を取り出して街灯のうす明かりに照らして見せた。

「あっ、これ！」
「ネックレスだ！」

三人が一斉に大きな声を上げた。

「うん、引き出しを開けて片っ端から写真を撮ったんだ、昨日ネックレスのことが判ってから、もしかしてと思って調べ直してみたら見つけた。これこそ、最高のチャンスのしっぽだ」

「そっか、ロクに会っても記憶が戻らなくちゃ話になんないもんな、無理やり何かしたら下手すりゃ犯罪者だぜ」

「そうなんだ、今日ウルシに会ったら研究室で会うように約束してもらおうと思ってたんだ、その手間が省けたってわけさ」

「おお、さすがにオレだろ」

「単純、ウルシ、ぐーぜん、ぐーぜん」

ユカの言葉を聞き、四人は久しぶりに声を立てて笑った。

「作戦を立てましょう」

「約束は明日の夜の8時、オレがまずロクに会う、隙を見て窓のカギを開ける」

「教授は泥棒の天才だから」

「ちょっとちょっと・・人聞きの悪い、うん、僕が忍びこんでネックレスを取る、その前にウルシ、何とか口実をつけてロクを部屋から出してくれ」

「わかった、それから？」

「ロクの帰ってくるのを静かに待つ」

「なるほど」

「そして隙を見てロクの首にネックレスをつける！」

「よし、完璧！」

「絶対に逃がさないぞ！チャンスのしっぽ！」

ようやく四人が揃った、そして、ロクを助ける作戦が立った。四

人の頭上には満天の星空がエールを送るかのように瞬きを繰り返していた。

25　思わぬ展開

ウルシは少し緊張気味にロクの勤める大学院の警備室の前に立った。つい数日前、ユカたちが門前払いを受けたあの場所だ。小さく深呼吸をして警備員に声をかけた。

「こんばんは、園田先生と約束をした漆山と言います」
「ああ、野球選手の・・・、うかがってます、今、先生に取り次ぎますから」
「ありがとうございます」
「では、どうぞ」

ウルシはもう1人の警備員に案内されて、ロクの研究室の前に立った。ノック、続いて中から聞き覚えのある声が返ってきた。

「はい、どうぞお入りください」

ウルシはゆっくりとドアを開ける、ロクは扉に歩み寄りウルシを出迎えた。

「こんばんは先生、漆山です」
「ごぶさたしています、対談の時はありがとうございました、またお会いできてうれしいです」
「こちらこそ、来週にはまた外国でコンペがあるそうで」
「ええ、漆山さんも開幕投手決定ってもっぱらの評判ですよ」
「いえ、まだ完全に決まったわけじゃないですけど」
「またまた、開幕は3日後でしょ、まあ、言っちゃいけないんでし

ょうね」

窓の外では3人が聞き耳を立てながら部屋の中をうかがっていた。もちろん聞こえるわけもないが、カーテン越しに洩れる明かりが桜の大木をぼんやりと照らしていた。ユカが小声で聞く。

「どう、うまくやってそう？」

「ちょっとわからないわ」

「あわてずに待とう、ロクが部屋を出ないとどうにもならないよ、中には入れればネックレスの入ってた引き出しの場所は覚えてる」

部屋の中ではウルシがロクに話しかけながらも、どうしたら部屋の外に出すことができるか考えていた。

「先生、僕らはお互い水島の代表として、先生は来週には海外に新しくできるタワー設計のコンペに出展されると、僕は今週末に開幕を迎えます。今日来たのはその前にお会いしてもう1度先生とエールの交換をしたいと思ったからなんです」

「そうですか、嬉しいですね、わざわざ夜遅く来ていただいてありがとうございます、長い時間はとれませんけどお話しましょう」

（何とかロクを部屋から出すには・・・）

「先生、すみませんがちょっとのどが渇いてるんでお茶を1杯もらえませんか」

「ああ、すみません、気がつかなくて、今、助手に持ってきてもらいましょう」

（失敗だ・・）

「ありがとうございます、あ、そうだ、ここへ来る途中見事な月が出てたんです、ここは町から離れてるせいかめちゃくちゃきれいだったんですよ、ちょっと見て下さい、悪いけど窓を開けますよ」

ウルシは窓際に歩くとカーテンを開け、おもむろに窓を開ける。

窓の下にいる3人に隠れるよう目配せをした。

（えっいきなり？）

3人は明かりの届かない木の陰に身を寄せ息をひそめた。

「へぇ、実は桜の大木があってちょうど満開なんです、どれどれ」

「ほんとだ、こりゃ最高だ、ほら月明かりに満開の桜」

「見事な月ですね」

「いやーいい、僕らの出発を祝ってくれてるみたいじゃないですか」

「そうだ、漆山さん、お茶といったけどちょっと乾杯しましょう、お酒は大丈夫ですか」

「いいですね」

「いいワインがあるんです、離れの部屋にあるので持ってきましょう、しばらく待っててもらえますか」

「もちろん」

ロクが部屋から出るのを見届けるとウルシは窓の外に向かって小さく叫んだ。

「今だ、教授、入れ」

「OK」

ウルシは教授の手を引っ張りあげると部屋の中に引きづり込んだ。

「オレは見張ってる、早くネックレスを！」

「わかった」

「急げよ、見つけたらテーブルの下に隠れるんだ」

「うん」

教授は写真と自分の記憶を頼りに引き出しを物色した。ところが

おかしい、あるはずのネックレスが見つからない。

「どうした、まだか？」
「いや、無いんだ、間違いなくこの引き出しなんだけど」
「えっ？記憶違いじゃないのか」
「いや、ここだ」
「まずい、ロクが帰ってきた、ひとまず隠れろ」

教授はあわててテーブルの下に身を隠した。

「お待たせ」
「あ、いえ、すみませんね・・」
「これがとっておきのワインです」
「あ、ありがとうございます」
「何だか顔色が悪いですよ」

二人は動揺した、このままでは作戦は失敗に終わる、最初で最後のチャンスかもしれないのだ、ようやくつかんだチャンスのしっぽを逃してはならないという気持ちが二人をさらにあわてさせた。
その時である、あせりを隠せぬ2人の耳に思わぬ言葉が飛び込んできた。

「探し物は見つかったかい、ウルシ？」
「えっ？」
「教授もいるんだろ」
「ロ、ロク・・・」
「みんなもいるなら入っておいでよ」

ロクは開け放たれたままの窓に向かってそう呼びかけた、まるで全てが分かっているかのように。

（ど、どういうこと？）
ユカとしーちゃんはお互いに顔を見合わせた、一体何が起こっているのかがわからないままに2人は窓を乗り越えて研究室に体を潜り込ませた。

静かな研究室の部屋の中に5人がそろった。それは意外な形での再会であったが、まぎれもなく5人がこの未来で顔を合わせたのだ。4人はロクを囲むようにして立った、ユカが素朴な疑問をストレートにロクにぶつける。

「ロクちゃん、どういうこと、あたしたちのことわかってたの？」
「うん」
「どうして？」
「偶然だよ、来週の渡航のお守り代わりにと思ってこのネックレスをたまたま付けたんだ、その瞬間全ての記憶がよみがえった。おとといの深夜のことさ」
「じゃ、昨日のオレの電話は」
「もちろんわかってたよ」
「じゃ何でこんな・・・」
「昨日ウルシから電話が合った瞬間、直感したんだ、特に理由はないんだけど、ウルシも僕と同じように記憶が戻ってるって」
「それで？」
「これも理由はないんだけど、ウルシが突然会いたいと言ってきた、どんなことかは分からないけど、僕を過去へ連れ戻しに来る、そんな予感がしたんだ、ちがう？」
「そうだ」
「ぼくは、逆にみんなを待っていた、知らないふりをしたのはちょっと様子を見てみようと思っただけさ」
「待っていたって？」

「みんなを説得するためだよ」

ロクは真剣なまなざしで４人を見つめた。

再びの決断

26　再びの決断

「どういうことなの園田くん」

ロクは4人に向かいゆっくりと語りかけた。

「みんなも結局ネックレスを使って未来へ来た、それぞれが夢を実現してるはずだよね、ぼくは未来の自分、そう今の自分に満足してる、あの時言ったよね、ぼくが夢を実現させるにはこれしかないんだって、だから、ぼくは過去へ戻るつもりはない、ネックレスの仕組みが分かった今、今日みんなと別れたら2度と手にしないようにするつもりさ、だからぼくを連れ戻そうっていうのはあきらめてくれ」

その言葉を聞いてあわててウルシがロクに言い寄った。

「待て、ロク、話を聞いてほしいんだ！」

「ぼくのほうこそ話を聞いてほしい、みんな、冷静に考えてほしいんだよ、今の自分、未来の自分はどうなの？志水さんはミュージカルをやってるんでしょ、ウルシはまもなく野球界のスーパースターだ、帰る必要があるの？ぼくらは誰ひとり悲しませていないんだよ」

「ロクちゃん、待って、違うの！」

「何が違うんだい」

「あたしたちロクちゃんを助けに来たの」

「助けに？」

「ロクちゃんがいなくなった後に未来の新聞が残っていて、そこに記事が出てたの、ロクちゃんが外国で狙撃されるって」

「えっ」
「そうなんだよ、ロク、記事では来週の月曜日に撃たれると書いてあった」

ロクはしばらく考えたのちに問いかけた。

「そう・・で、ぼくは死ぬの？」
「わからない、そこまでは書いてなかった」
「撃たれる・・」
「あたしたちみんながここに来たのはロクちゃんを助けるためなの、お願い、それだけはわかって！」

ユカは必死になって話した。ロクの夢を奪いに来たのじゃない、それだけはどうしてもロクに伝えたかった。

「・・・わかった、ありがとう。それは本当の事だろう、これだけ信じられないことを体験したんだから僕でもわかる」
「わかって・・くれて・・ありがと」
「なら・・、みんなでここに残らないか、ぼくは出張をやめる、ぼくの命を救いに来てくれたみんなには心から感謝する。命の恩人だ。それならみんなが今の夢を手にしたままで、また、一緒に過ごしたい、それができるならこんなにいいことはないと思わないか？」

未来に残る・・
４人の頭の中に新しい混乱が生じた。今まではロクを助けること、そのためにはロクを過去へ連れ戻すこと、それだけしか頭の中になかった、しかし、ロクの命を救いさらに全員で未来へ残るという新たな選択肢が突然目の前に現れたのだ。気付かなかった。しかもここでは全員が自分の夢を手に入れているのだ。

「ウルシ、君は今週末に開幕投手としてマウンドに立つんだろ、それを捨てていいのかい」
「そ、それは・・」
「みんなもここでの新しい人生がスタートしてるはずだよね、ここに残ることの何が悪いの？」

ウルシは自分が真新しいマウンドの上に立っている姿を、しーちゃんは舞台の上で声を高らかに歌っている自分を、教授は大勢の前で論文を発表している場面を思い描いた。
それはそれぞれが夢に思い描いていた姿だった、そして、この世界では夢ではなく紛れもない現実なのだ。

（未来に残る・・）

ユカもまた迷っていた。わずか5日間の未来の日々、たった5日間の中だけなのにもう何年もいるような気がする、入社式、テレビ局の人たちとの出会い、初めての取材、わずかに触れた大人の世界は考えただけでも魅力あふれるものだった。

（峰岸部長さん、久本次長、山梨先輩・・）
（たくさんの新しい出会い・・・）

でも・・何かが足りない気がする、何かが・・あたしはいきなり見晴らしのいい頂上に来てしまったんだ。途中の景色を見ることなく。

「みんな、どうするの？」
「・・・」
「あたしは、何か違う気がする、確かに夢は手にしてるけど何か違う気がするの・・」

「夢は人から与えられるものじゃないってこと？」
「それもあるけど、何かが・・わからない」
「・・・」

しばらくの沈黙の後、口を開いたのはやっぱり教授だった。

「僕らは仲間だ、でもそれぞれが別の人間でもある。そして僕らはここではもう大人だ。みんな自分の人生をそれぞれ別々に歩いていくんだ、ならば、僕らは仲間だけれど、その決断はそれぞれが自分でするしかないんじゃないか」
「自分で・・」
「そうだ、自分自身で考えに考え抜いて結論を出す、その結果僕らはバラバラになるかもしれない、それぞれの記憶さえも失うことになるかもしれない、でも自分の決断に責任を持つのも自分自身じゃないか」
「人生に責任・・」

（教授の言葉はどうしてこんなにあたしたちの心につきささるの、人生なんて、あたしの頭にはない言葉・・）

ユカは自分がまだ子供なんだと痛感していた。
その次に口を開いたのはしーちゃんだった。

「ねぇ、みんな、こういうことにしない、土曜日までそれぞれが自分で考えるの、悩んで悩んで悩みぬくの、そして自分で結論を出す、帰ると決めたならここに戻ってくる、園田くん、もし帰らないなら見届けてくれる？」
「わかった」
「漆山君がここに来ないということはマウンドに立っていることになるわ」

「ああ」
「みんな、どう？」
「ユカは？」
「・・・うん」

ユカが小さくうなずくと、４人も同じように小さくうなずいた。
そして、ユカは迷った末に仲間たちにこう告げた。

「あたし・・みんなにひとつお願いがあるの」
「何？」
「あたし、金曜日の夜に初めてテレビに出る。まだ、入社して１週間、インタビューのアシスタントだから、横に座ってる程度だけど、でも、あたしにとってはとっても大きな仕事・・・みんな、あたしがこの未来でアナウンサーとしてやっていけるか見てくれない？」

ユカは真剣なまなざしで、しーちゃんを、ウルシを、教授を、そしてロクを順番に見つめた。

「いいけど」
「うん」

ウルシと教授が顔を見合わせて答える。しかし、ユカの真意がわからずに戸惑っているようにも見えた。

「でも、ユカ、どういう意味なのか教えて」
「あたし、自信がないの、夢を手渡されてもそれを大事に育てていけるのかって・・」
「・・・」
「まだ心は大人になりきれてない、だから、みんなの目で見てほし

い、ダメならば、ダメってはっきり言ってほしい、わたしたち、ここまでケーブルカーであっという間に連れて来てもらったようなものよね、自分の足で登ってきたわけじゃない。だから、わたしに力が無ければもう一度最初から山道を登るつもり」

しーちゃんはコクリとうなずくとユカの目を見つめ言った。

「わかったわ」

永遠の別れとなる可能性を秘めた満月の夜は静かにそしてゆっくりと更けていった。

出会い

27　出会い

「危ない！」

まぶしい朝の光の中、駅を目指して駆けるユカの左から1台のトラックが猛スピードで近づいてくる。男はユカの左腕をつかみ、半ば強引に自分の方へユカを体ごと引っ張った。

目の前を間一髪トラックは走り去る。

男の一瞬の判断がなければ、事故はまぬかれなかったろう。

「大丈夫かい？」

「す、すみません」

「それにしてもひどいなぁ、こんな狭い路地をあんなスピードで走るなんて」

「あ、ありがとうございます、本当に助かりました」

「ちょっと乱暴に引っ張っちゃってごめんね」

「とんでもない、引っ張ってもらわなければ完全にはねられてました、ありがとうございます」

「とにかく良かった、急いでたの？それとも、何か考え事でもしてたんだろ、気をつけなくちゃ」

男は上下濃紺のジャージ姿、年齢は20代だろうか、ランニングキャップの下に温かい笑顔があった。

「ジョギングですか？」

「うん、トレーニングかな」

「これからは気をつけます」
「正解だ、じゃ」
男は走り去る、そのあとにカチャカチャというかすかな音がユカの耳に残った。
（いけない、いけない、でもあの人が助けてくれなかったら・・あっ、名前ぐらい聞くんだった、命の恩人なのに）
４人が別れてから2日が過ぎた。男の言う通りユカの頭の中は周りの事に気が向かないぐらい乱れていた。未来へとどまる、過去へ戻る、選択肢は2つに1つ。
めまぐるしく通り過ぎたわずか１０日あまりの日々、このわずか１０日ばかりの短い時間の中だけでも、何回か大きな決断を迫られることがあった。そのたびにユカも自分の心に正直に道を選んできたつもりだった。
しかし、今回の決断は今までのどれよりも大きく、そしてその意味は重い。
自分の人生を自分で選ぶ最後の決断なのだ。そして、だれにも相談することはできない、それはユカだけでなく、４人の仲間すべてにあてはまることだ。教授の言った一言がいつまでもユカの心の中にこだまのように繰り返しよみがえる。
「自分の人生は自分で責任を持たなくちゃいけない」
自分の人生・・・
ユカはその言葉を心の中で何度も唱えた。
「おはよう、篠宮君」
「あ、久本さん、おはようございます」

「見てると、この2日ばかりなんだか元気がないんじゃないか、さすがに疲れたか」
「いえ、大丈夫です」
「初日2日目は緊張して疲れも忘れるからな、少しだけ慣れてくる1週間目あたりにぐっと疲れが出るんだ」
「ほんとに大丈夫です」
「新人は最初の半年は土日が休みだ、今日を乗り切れば一息つけるからな、気合い入れてけよ」
「はい！」
「今日の仕事はわかってるな、アシスタントとはいえテレビの画面に出るんだぞ、しっかり打ち合わせをしておけよ」
「わかりました、あの、原田さんは」
「おお、もうスタジオ入りしてる」

原田はスタジオの隅にある打ち合わせと休憩を兼ねたブースで台本を目で追っていた。

「原田さん、おはようございます」
「おはよう、篠宮君、待ってたよ」
「今日はよろしくお願いします」
「うん、じゃ簡単な打ち合わせ」
「今日、インタビューする方って？」
「地元出身のアスリートさ」
「陸上の選手ですか」
「ま、そんなところだ」
「あの、あたし、まだ、台本すらもらってないんですけど・・」

ユカは両手を上げてジェスチャーを交えながら原田に質問した。

「実は、わざと渡してないんだよ」

「えっ」
「今日の君の仕事は僕のアシスタントだ、最初の自己紹介のあとは僕とゲストの話をじっくり聞いていてくれ」
「聞く・・だけですか？」
「聞き終わったあとで君に話を振る、感じたままの感想を言葉にしてくれればいい、何か質問してもかまわないよ」
「アシスタントというより、視聴者みたい」

原田は少し笑みを浮かべながらユカの顔を見つめ、その次には真剣な表情でユカが口にした疑問に答えた。

「それだ、今日のインタビューでは新人の君の生の感想を聞きたい、それも含めて１つのドキュメントなんだ、本当なら君には全く何も知らせずにやりたかったんだけど、それじゃあ、さすがに君も不安だろうから一応話はしておくけど、あとはぶっつけ本番でいい、あらかじめ台本を読んでいたらそこには驚きも感動もない」
「そんな、無茶ですよ、あたしの感想なんて・・まして初めての出演なのに」
「ま、生放送じゃないから心配しなくていい、放送は夜だ、いざとなれば編集するだけさ」
「はあ」
「自己紹介ぐらいは練習しておけよ、１時間後にＡスタジオだ」

ユカはとまどいを隠せぬまま化粧室へと足を運ぶ、鏡の中の自分をじっと見つめたあとそっと目を閉じた。
（とにかく、しっかり話を聞こう、みんな、あたしのことを見てくれるんだ、恥ずかしくないように仕事しなくちゃ）
ユカは大きく１つ深呼吸をしてスタジオに向かった。
「本番用意して下さい！」

マイクを通して大きな声がスタジオに響き渡った。ライトに照らされた椅子が3つ、1対2という形でセットされている。

「篠宮君、記念すべきスタジオデビューだぞ、頑張れ」

久本がポンとひとつユカの肩をたたいた。

「はい！」

「ゲストの方入りまーす」

声に押されるようにして1人の２０代らしき青年がスタジオの袖から入ってくる。

「こんにちは、茶谷です、はじめまして」

「あっ！」

青年と顔を合わせた瞬間、ユカは思わず声を上げた。

「あっ、君は確か今朝の・・」

「何だ、知り合いなのかい」

「いえ、今朝、偶然、あたしがあやうくトラックにはねられそうになったのを助けて下さったんです」

「へぇーそりゃまた偶然だ、あ、はじめまして、今日のインタビュアーを務めます原田です」

「はじめまして、よろしくお願いします、ちょっと緊張してたんですけど何だかリラックスしてきちゃったな」

「あたし、篠宮です」

「茶谷です、あらためてよろしくお願いします」

茶谷と名乗った青年は二人と握手を交わすと今朝と同じ温かい笑顔をユカに投げかけた。

ユカと原田、そして茶谷の3人はまばゆいばかりの照明の下テーブルを挟んで向かい合って座った。
あとはスタートの合図を待つばかりである。
ユカは胸の鼓動を押さえるようにひとつ大きく深呼吸をして、合図を待った。
テレビカメラのランプが赤く光るのが見えた。

「それでは本番入りまーす」
「5・4・3・2・1　スタート！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1208v/

僕たちの挑戦

2012年1月6日20時50分発行